

# 太平天国の西征開始と南昌攻撃

菊池 秀明

はじめに

近年の中国史研究における大きな変化は、新史料の発見によって歴史の具体像が明らかになった点であろう。とりわけ清朝政府の公文書である檔案史料の公開は、時代の要請に基づいた一面的な歴史認識の見直しを可能にした。太平天国運動（1850-64年）についても今こそ「革命の先駆者」あるいは「破壊者」といった従来の評価を超えて、客観的な立場からその実像を解明する必要が高まっている。

かつて筆者は太平天国の生まれた原因が広西移民社会のリーダーシップを握った科挙エリートと非エリートの対立にあり<sup>1)</sup>、清朝の統治が行きづまる中で人々は「理想なき時代」を乗り越える処方箋を熱望していたと述べた<sup>2)</sup>。また筆者は金田蜂起から南京攻略に至る太平天国蜂起の歴史を分析し、その特徴はユダヤ・キリスト教思想の「不寛容」に影響された上帝会の強い宗教性にあると指摘した。この特質は太平天国にたぐいまれな高い規律と強力な戦闘力を与えたが、その排他的な攻撃性ゆえに「妖魔」と見なされた清朝官員、兵士とその家族に対する徹底的な殺戮を生み出した。またそれは虐げられた者の救済論であったために、辺境の下層移民出身だった太平軍将兵の都市住民に対する怨嗟や抑圧を後押しする役割を果たしたと結論づけた<sup>3)</sup>。

本稿が取り上げるのは、太平天国が1853年6月から行った西征の開始と南昌攻撃（同年9月まで）である。天津に迫って清朝を危機に陥れた北伐と比較した場合、西征の歴史は注目を集めてこなかった。その理由の一つとして残された史料の偏りがあり、清朝側の記録を検証し得るだけの他史料が少ないという事情があった。簡又文氏はこの時期の歴史を太平天国史上の暗黒期と呼び、西征軍の活動を描いた部分（第12-14章）に「戦事紀略」という表題をつけて、その詳細な分析は他日を期したいと記している<sup>4)</sup>。

1990年代に中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』が出版され<sup>5)</sup>、檔案史料については系統的な分析が可能となった。西征史についても朱哲芳氏の専著<sup>6)</sup>と崔之清氏らによる軍事史研究が出され<sup>7)</sup>、研究の空白は埋められつつある。さらに新たな史料の発掘、整理および地域社会との関連を重んじた研究成果として、杜徳鳳『太平軍在江西史料』および同氏による南昌攻撃に関する論考<sup>8)</sup>、徐川一『太平天国安徽省史稿』<sup>9)</sup>などが存在する。だが総じて言えば革命史パラダイムが崩壊した影響を受け、新史料を活用した研究は行われていないと言えよう。

本稿はこうした現状を踏まえ、太平天国西征の歴史を出来る限り詳細に検討することを目的とする。史料的には筆者が台北の国立故宮博物院で収集した檔案史料、イギリスの National Archives で収集した地方檔案を日本国内所蔵の地方志と共に活用する。また西征を 19 世紀中葉の揚子江流域における社会変容という視点から捉え直し、太平天国の進出に対する地域社会の反応とその影響について分析を加えたい。それは太平天国の歴史を階級闘争史観から解き放ち、新たな中国近代史像を構築するための一階梯になると思われる。

## 1. 西征軍の出発と南昌攻撃の開始

### (a) 西征軍の出発とその規模、目的について

南京を首都に構えた太平天国が揚子江上流へ軍を送ったのは 6 月 3 日であった。欽差大臣向荣は「船千余隻が銅鑼を鳴らして帆を揚げ、蜂擁として前進してきた」「三十日（6 月 6 日）に賊船は当塗から蕪湖へ至った」<sup>10)</sup>と述べている。安徽寧国府に置かれた糧台（食糧基地）が襲われることを憂慮した向荣は 3,000 名の兵を当塗、蕪湖県へ送ったが、太平軍は遡上を続け、10 日には安慶を占領した。だが 2 月に攻防戦が行われた安慶は「城は破壊され、人民は尽く逃げ、倉庫には錢糧が全くなかった」<sup>11)</sup>と荒廃していた。このため「賊は城中にいること数日、民間の財物を搜索したが、一つとして得るところがなく、あちこちを掘り返して該司（按察使張印塘）が井戸の中に隠しておいた銀を奪い去った」<sup>12)</sup>とあるように、太平軍は物資の搜索を終えると 13 日に一度全軍が退出した。

一般に太平天国の西征は揚子江上流の要地を占領して領土を広げ、南京の守りを固めるべく行われたと考えられている<sup>13)</sup>。少なくとも湘軍の登場によって上流からの軍事的圧力が強まった 1854 年からは、そうした側面が強まったことは否定できない。だが崔之清氏が指摘しているように、西征が始まった当初の太平軍に拠点の確保や地域経営という意識は希薄であった<sup>14)</sup>。安慶を離れた太平軍は 6 月 13 日に江西彭澤県を占領し<sup>15)</sup>、18 日には揚子江と鄱陽湖を結ぶ要衝の湖口に到達したが、これらの地に郷官を設置して守備隊を駐屯させるようになったのは 11 月以後のことであった<sup>16)</sup>。

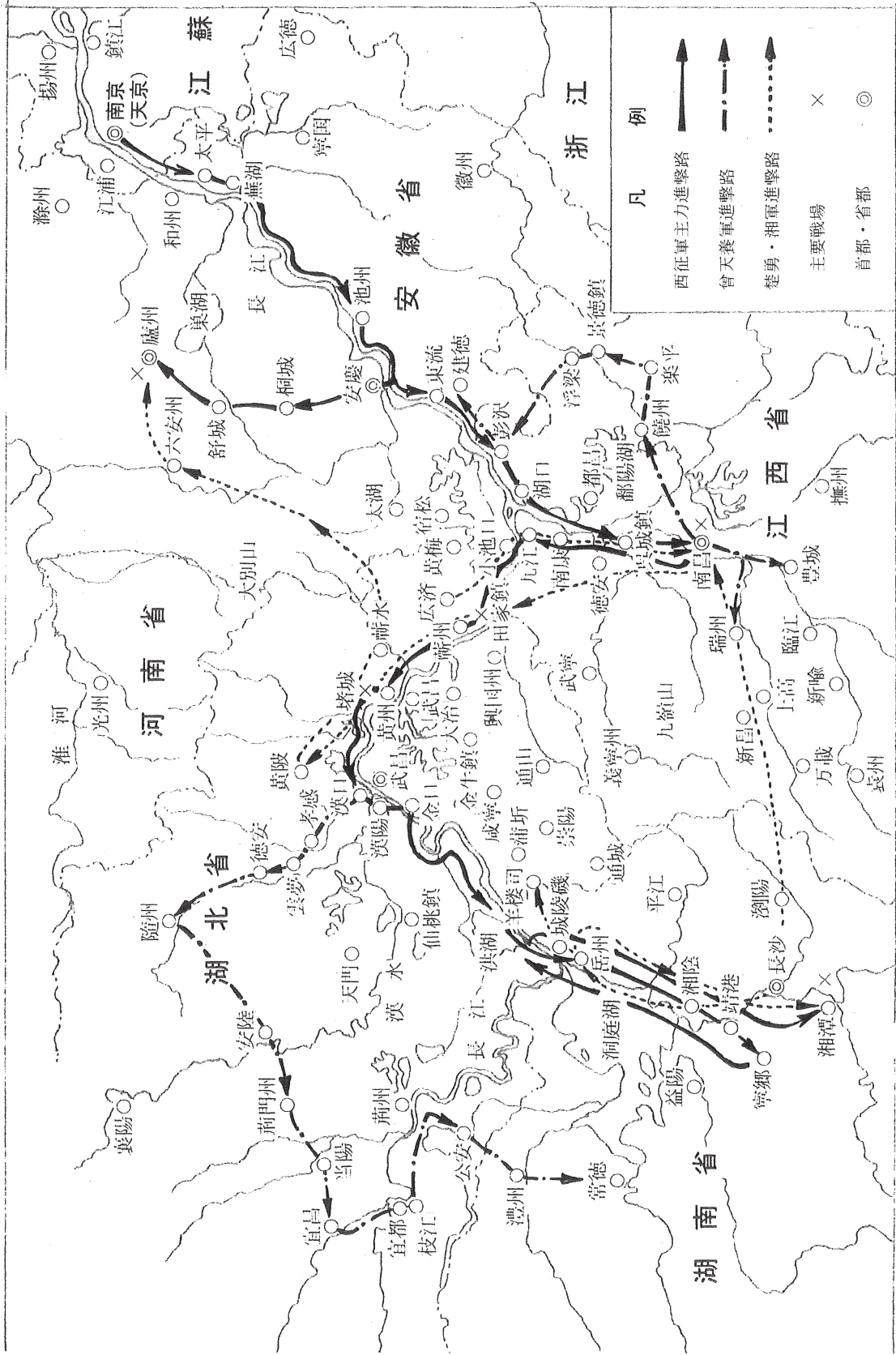
次に西征軍の人数について見ると、先の向荣の上奏には「船千余隻」とあるだけで、具体的な兵力は記されていない。すでに杜徳風氏が考証しているように、南昌攻防戦に参加した彭旭『江西守城日記』は「[五月] 十八日（6 月 24 日）寅刻に賊船千余が蟻のように至った」<sup>17)</sup>と述べており、船 1,000 隻という数字は確度の高い情報と考えられる。また張徳堅『賊情彙纂』によると、太平軍の小型船は 1 隻につき 10 名ほどが乗っており、単純計算すれば 1 万人の兵力だったことになる<sup>18)</sup>。しかし向荣の報告では「その船中にはあるいは六、七人、あるいは二、三人と一定しなかった」<sup>19)</sup>とあり、実際には定員に満たない船も多かった。さらに同治『新建県志』は「老長髪はただ七百余、途中脅されて従った者が約六、七千人」<sup>20)</sup>と述べており、南昌から近い豊城県に住んでいた毛隆保『見聞雜記』も「賊は万人に満たなかった」<sup>21)</sup>と記している。これらの状況から 1853 年 6 月に南昌へ向かった軍勢は数千人と

見るのが妥当であろう。

続いて西征軍の指揮官について見ると、開始時に最も序列が高かったのは春官正丞相胡以晄（後の豫王）であったが、彼は安慶一帯に留まり、1854年1月に清朝側の臨時省都であった廬州を攻めた<sup>22)</sup>。南昌攻撃軍を指揮したのは夏官副丞相頼漢英（洪秀全の妻頼氏の弟）で、彼は「頗る文墨に通じ、兼ねて医理を知る」と言われた下層知識人であったが、後に東王楊秀清に「その無用を斥けられて」<sup>23)</sup>更迭処分を受けた。この外に勇猛を謳われた検点曾天養<sup>24)</sup>、指揮林啓容<sup>25)</sup>、白暉懷<sup>26)</sup>らが南昌攻撃に加わったが、これを広西での蜂起から屢々先陣を率いた丞相林鳳祥、李開芳、吉文元の3人が指揮を執り、2万人を擁した北伐軍と比較すれば、指揮官の経験および兵力の差は歴然としていた<sup>27)</sup>。少なくともほぼ同時期に始まった二つの作戦のうち、太平天国首脳部が西征よりも北伐を重視していたことは間違いない。

それでは西征の目的は何であったのだろうか。第一に考えられるのは、江南、江北大営の設立によって清軍の防備が手薄となった揚子江中流域に兵を送り、ここで食糧を獲得して南京城内の備蓄を増やすことであった。謝介鶴『金陵癸甲紀事略』によると、太平天国統治下の南京は1853年夏の段階で約24万人の人口をかかえていた<sup>28)</sup>。規定では兵士25人つき1週間で米10キログラムが支給されることになっていたが、食糧の不足によって配給はしばしば滞り、「江寧城中でみなが粥を食い、揚州の城内では皮箱を煮て飢えをしのいだ」<sup>29)</sup>と言われた。また重労働に従事する男子や高級幹部の役所に配属された者は多めの米が配られたが、一般の男子や広西、湖南出身の女子は一日当たり500グラムほどで、湖北や安徽、南京の女性には一日300グラムの米しか与えられなかった<sup>30)</sup>。さらに1854年9月には南京の女たち数万人を城外へ駆り立て、村々へ行って稲の刈り取りを行わせた<sup>31)</sup>。南京の食糧事情が決して安定していなかったことが窺われる。

数年間にわたる西征軍の活動が穀倉地帯であった江西、安徽および湖北、湖南の広範な地域に及んだのは、食糧の確保と南京への輸送を目的としていたことを裏付ける。6月に南京を出発した部隊も「船は多かったが、半ばは空船」<sup>32)</sup>とあるように運搬用の船を多く含んでおり、「采石および梁山を過ぎる時に住民から豚肉、ニワトリ、アヒル、野菜などを買い取った」<sup>33)</sup>「初め小葉をかうに、必ず数倍の値段を払った。わが豊[城]で利益も貪る者がこれを聞いて食物を送ったところ、また大いに利益を得た」<sup>34)</sup>とあるように食物の獲得には熱心だった。また8月に湖広総督張亮基は「長江は金陵から江西までの一千数百里、全く阻むものがなく、賊船の航行は自在である。前月初旬には江西の賊船が百余隻、米糧を満載して、遠く江南の賊へ送っていた。今や晩稲が収穫期を迎え、近くの野には余った穀物があり、賊匪は運送することが甚だ容易である。恐らく江南の賊が坐困することはないだろう」<sup>35)</sup>と述べており、南昌派遣軍がかなりの食糧を南京へ輸送したことがわかる。さらに『賊情彙纂』は次のように述べている



太平天国西征图① (1853年6月~54年6月)

賊に食糧をもたらすものが、上游にあっては全て船運を用いていることは、言うまでもないことである。癸丑の年（1853年）五月に江西、湖北を犯してから、僅かに甲寅の年（1854年）九月から年末まで数ヶ月のあいだ湖北が肅清された。だがそれ以外は帆やマストが連なり、一つとして江寧に物資を補給する船でないものはなかった。

賊が他地方へ行くのは何か意図があつてのことだが、江西、湖広へ行くのは専ら食糧を奪うためだった。どうしてそれがわかるかと言えば、いま捕虜となつた賊が持っていた命令書の中に「なんじ誰それは水営左三軍の船一千三百隻に乗り、兵士を率いて江西南昌、湖北武昌一帯へ行き、貢ぎ物や食糧を集めて天京へ輸送せよ、誤るなかれ」とあつたからである……。ここから賊が求めているものが専ら食糧であることがわかる。

西征軍の重要な任務として食糧の調達があつたことが窺われる。張徳堅は元太平軍の典聖糧官（食糧管理者）などの証言として、南京では豊備倉、復成倉、貢院の3カ所に聖糧館が置かれ、1853年末の段階で穀物127万石、米75万石が備蓄されていたと述べている。南京の太平軍は毎月米30万石を消費したため、およそ4ヶ月分の食糧が蓄えられていたことになるが、それらは多くが西征軍の「戦果」であつた。さらに聖庫館には銀263万両、錢335万5,000串ほか多くの貴金属が所蔵されていたと言われる<sup>36)</sup>。これら都市住民から没収した資金を使って食糧を調達することもあつたと推測される。

もう一つ西征軍派遣の目的として挙げられるのは、清朝側が救援を送らざる得ない地区に派兵することで、南京および揚州、鎮江一帯に布陣した清軍兵力を分散させ、軍事的な圧力を軽減することであつた。向榮は早くからこの点を認識しており、6月22日の上奏で「逆賊が四出して紛擾するのは、わが兵力を分けて専ら金陵を攻めることが出来ないようにするためである」<sup>37)</sup>と指摘した。また6月28日には「大悪人どもは金陵に盤踞しているが、彼らはその仲間をあちこちに派遣してわが力を分散させ、堅固な地に恃んでわが軍を疲弊させ、久しく占拠することでわが兵糧を浪費させようとしている。もし大兵を少しでも移動させれば、東南の半壁はさらに持ちこたえられない」<sup>38)</sup>とあるように、太平軍が各地に兵を派遣したのは清軍の兵力を分散させるためであり、もし南京周辺の兵を引き抜いて救援に向かわせれば、かえって江南の戦局を悪化させると述べている。

しかし当時の江西は清軍の兵站基地という役割を担っており、武昌陥落後に南昌には糧台総局が設立された。3月に広東から粵海関の税銀12万両余りが南昌へ移送され<sup>39)</sup>、4月と6月には粵海関餉および広州將軍が軍餉として備えていた銀など29万4,000両が江西へ送られた<sup>40)</sup>。このため7月4日の上諭で咸豊帝は「(太平軍の)意図は南昌を直撲して、江南の大軍を牽制することにあるのか」と述べたうえで、南昌の「情形が緊急」であれば向榮に「兵を送って応援せよ」<sup>41)</sup>と命じた。

これを受けた向榮は7月に「江西省会という要区であり、また大營糧台の根本であることを鑑」みて、鶴麗鎮総兵音徳布の率いる兵1,200名を南昌へ出発させた<sup>42)</sup>。また彼は北伐

軍が進出した河南にも総兵瞿騰龍率いる兵 2,000 名を送っており、1854 年初めに江南大営は「実に出撃して戦える者は五、六千人に過ぎず、城が大きいので包圍するに足りない」<sup>43)</sup>とあるように兵力不足に陥った。西征の目的が南京周辺の清軍兵力を分散させることにあったとすれば、南昌を攻略目標としたのは一定の効果をあげたと考えられる。

ちなみに太平天国がこうした戦略的意図を持っていたことは、断片的な記録ながら窺うことができる。『粵逆紀略』によると、龍鳳雛（望江人）は太平天国に数千言からなる上書を提出した。そこで彼は「浪戦するなど勸め、嬰城を固守してわが軍を疲れさせ、軍を分けて略奪に出ることで、わが勢いを牽制せよ。安慶を門戸とし、もって江西をうかがえ」<sup>44)</sup>と主張した。そしてこの上書を評価された龍鳳雛は承宣の職務を与えられたという。

また 1853 年 12 月に南京を訪問したカトリック宣教師クレブリン (R. P. Stanislas Clavelin. S. J.) によると、洪秀全は南京周辺の清軍を攻撃したいと願う首領たちに対して「あれら満清の軍隊を遊興に溺れさせて彼らの身体を消耗させておけ。かつわが精兵は北方にあり、もし我々がいまわが仇敵を攻めれば、これらの妖魔は北方に妖気を吹き散らすだろう。我々は将来彼らを包圍し、妖魔の国を全部たたきつぶすのだ」<sup>45)</sup>と述べたとある。ここから太平天国首脳部が北伐を成功させるためには、清軍を各地に分散させる必要があり、南京周辺に清軍が布陣することもやむなしと考えていたことがわかる。そうした前提に立てば、西征も「満清の軍隊を遊興に溺れさせ」「北方に妖気を吹き散」らさせないための戦略の一つであったと推測されるのである。

## (b) 清軍の防衛体制と南昌攻防戦の開始

さて南昌で防衛の任務を任されていたのは、2 月に九江陥落の責任を問われて革職留任の処分を受けた江西巡撫張芾であった。6 月 13 日に太平軍の西進を初めて報じた彼は、なお長江流域の警備強化を訴え、湖北広濟県で抗糧暴動の鎮圧に当たっていた湖北按察使江忠源を安慶へ向かわせるように要請した<sup>46)</sup>。だが 6 月 20 日の上奏で張芾は、太平軍が九江へ向かう可能性は低いと述べたうえで、「現在江西省垣はもとより完善の区であり、かつ大営糧台の根本である。いま該逆の大股が真っ直ぐに向かっているのは、わが腹心を攻めて食糧の補給路を絶とうとする計略である」とあるように、太平軍の攻撃目標が南昌であると断定して各地から援軍を派遣するように求めた。彼は次のように述べている

現在逆船は風に乗って直進しており、省垣を攻めようとしている。下流の湖口、南康、呉城各地には防衛の兵が少なく、河面も大変広いので恐らく防ぐことは出来ない。慌ただしい中のことで、情勢は緊迫している。省城の守備兵は三千に満たず、官紳両局による団練、壮勇もわずか二千余名である。城外に布陣して犄角の勢いをなそうとしても、城壁を守る人数が足りないために半数は回さざるを得ず、城外は孤軍となって策応できない。急ぎ贛州鎮兵八百名および袁州、銅鼓營の兵五百名を省城の防衛に動員した

が、贛州鎮は省城から遠く離れており、よしんば援軍が袁州、銅鼓共々時間通りに全て到着しても、兵力はまた甚だ薄弱で迎撃には足りない<sup>47)</sup>。

ここから南昌の兵力が団練や壯勇を併せても 5,000 名と少なく、省内から動員できる兵も 1,300 名程度であったことがわかる。南昌の団練は太平軍が長沙を攻撃していた 1852 年 9 月に幫辦軍務を命じられた前任刑部尚書の陳孚恩（新城県人）が江西布政使陸元煥らと組織したもので、10 万両の経費を用いて「官紳がそれぞれ一局を設け、壯勇を召募して軍装器械を急ぎ製作した」とある。また彼らは南昌の城壁を補修し、「いまだ十分に堅固とは言えないが、なお防禦には役立つ<sup>48)</sup>」と報じていた。

ところが実際に太平軍が迫ると、「省城の舗戸や住民は紛々と搬遷し、一時は雇うべき船もなかった<sup>49)</sup>」「人々が通りを塞ぐほどにごった返して、泣き叫ぶ声が響いた<sup>50)</sup>」とあるように、城外へ避難しようとする人々が殺到した。「城中の文武官員で城外へ逃げる者は百七十余名」と地方官で逃亡する者も続出し、城内の郷紳で踏みとどまったのは陳孚恩ら 4 名であったという<sup>51)</sup>。さらに練勇の多くは「市井の遊び人」であったため、地方官主導の「官団」を中心に多くが戦わずして逃散した。陳孚恩が急ぎ点呼を取ったところ、官団 900 名のうち残っていたのは 490 名に過ぎなかったとある<sup>52)</sup>。

こうした現実を前に、南昌の清軍が頼りにしたのは九江に到着した江忠源の楚勇であった。6 月 18 日に張芾の「省都に来て防衛されたい。切に九江を墨守するなかれ」という要請を受けた江忠源は、楚勇 1,200 名を率いて南昌へ急行した<sup>53)</sup>。6 月 22 日に彼が南昌へ到着すると、それまで「固志はなく、久しく議論しても決しなかった」張芾らは早速会議を開き、「兵事をこれ（江忠源）に委ね、文官の知府以下、武官の副将以下で調度に従わない者は軍法に照らして処罰する<sup>54)</sup>」と取り決めて軍の指揮権を江忠源に委ねた。

江忠源がまず取り組んだのは、桂林および長沙攻防戦の経験を踏まえて城外の民家を焼き払い、太平軍に攻撃の拠点を作らせない措置であった。『江西守城日記』は「楚勇二百人を城壁の下へ降ろし、附郭の廬舎を燃やした。炎の光は天を焦がし、燃えさかる火に人々の恨みの声が上がった<sup>55)</sup>」と記しており、城西の滕王閣（江南三大名楼の一つ）など多くの建築物が焼失した。また彼は城内の兵の配置を整え、逃亡を禁じる軍律を施行して楚勇に清軍兵士や練勇を監視させた。江忠源はみずから部下を率いて城内を巡回し、命令違反者を発見すると直ちにこれを斬った。さらに張芾も城内の警備を強化し、太平軍の密偵 36 人を捕らえて処刑したという<sup>56)</sup>。

太平軍が南昌へ到達したのは 6 月 24 日であった。この時城外は鎮火しておらず、西北隅の徳勝、章江門外に停泊した船から將兵が「紛々と上陸して消火<sup>57)</sup>」にあたった。また燃え残った家屋は「障壁がなお多く林立して、該逆はその中に立てこもって銃丸をうがち、密かにトンネルを掘った」とあるように、太平軍兵士が身を隠す場所となった。そこで江忠源は張芾と協議のうえ、26 日に百長李光寛の率いる楚勇 400 名を永和門の空心砲台から出撃さ

せた。太平軍は3-4,000人でこれを迎え撃ったが、督糧道・南昌府知府鄧仁堃、候補知府耆齡、候補知府林福祥らが援護射撃を加えると、「賊の大隊に命中し、傷斃すること無数」<sup>58)</sup>と損害を受けた太平軍は芝罘園に撤退した。清軍も李光寛が伏兵の攻撃を受けて戦死し、林福祥が負傷するなど90名以上の死傷者を出したが、太平軍に打撃を与えたことは城内の士気と江忠源の威信を高めた<sup>59)</sup>。楚軍の到着を知った太平軍も「江妖はどうしてこんなに早く来たのか？」<sup>60)</sup>と驚き、攻撃に慎重になったという。

またこの戦いの後に張芾が「賊鋒はやや挫いたが、兵力は甚だ少なく、城中の商民がことごとく逃げたために、百物が欠乏している」<sup>61)</sup>と報じたように、慌ただしく準備を迫られた清軍にとって物資不足は悩みの種であった。とくに新石門外で糧餉を担当していた呉老三と彼の率いていた郷勇が逃走し、「糧餉、器械と銅炮四尊が全て賊のものとなった」<sup>62)</sup>影響は小さくなかった。だが27日に「紳団」鎮洪軍の統率者であった胡鴻泰らが進賢門外の繩金塔寺を焼き払おうと出撃したところ、漕米倉庫の前で太平軍と遭遇し、これを撃退して米2万石を城内へ運び込んだ。その結果「現在城中の糧餉、軍火は共に充足している」<sup>63)</sup>とあるように清軍の備蓄には余裕が生まれたという。

江忠源が次に行った施策は、太平軍のトンネルによる地雷攻撃を未然に防ぐことであった。彼は人夫を動員して、章江門から得勝門へ至る城壁の内側360メートルにわたって新たに月城を築き、その中に楚勇を配置した。また得勝門の老月城に深い濠を掘り、底に甕を設置してトンネル工事の音を探知させた<sup>64)</sup>。一説ではこれらの作業は間に合わず、6月29日夜に太平軍は得勝門外で地雷を爆発させ、城壁が10数メートルにわたって崩落した。だが城内の清軍が用意していた土嚢を積んで応急措置を施し、火器を乱射して太平軍の突撃を阻むと、「賊はあえて近づかなかった」<sup>65)</sup>とあるように攻撃は失敗した。また7月3日に防禦の工事が完成すると、江忠源はトンネルの入口がある文孝廟を焼き払おうと考え、2度にわたり兵を出撃させたが成功しなかった<sup>66)</sup>。

さらに江忠源と張芾が協力して取り組んだのは、引き続き各地からの援軍を要請することであった。南昌到着直後に江忠源は守備隊の兵力不足を指摘し、江南大営の軍を一部振り向けるように求めた<sup>67)</sup>。また張芾の報告を受けた清朝は湖北、湖南両省に「迅速に救援に赴き、速やかに省城の包囲を解」<sup>68)</sup>くように指示した。これに対して湖北巡撫崇綸は手持ちの兵力1500名が新兵であること、南昌の太平軍についても「真賊は多くなく、船に女や子供を乗せ、難民を連行して数合わせしている。烏合の衆で人数は多いが、その実は無能である」<sup>69)</sup>ことを理由として派兵に難色を示した。

だが署湖広総督張亮基は「万にも抽撥出来ない」総兵力3,000名の中から都司戴文蘭の率いる兵勇2,000名を南昌へ送ることに同意した<sup>70)</sup>。また署理湖南巡撫駱秉章は都司孫漢煥の兵600名を江西へ向かわせると回答した<sup>71)</sup>。さらに7月に駱秉章は前礼部侍郎曾國藩が湘郷県で組織した湘勇2,000名、江忠源の弟である候選訓導江忠淑が新寧県で募集した宝勇1,000名および官兵600名を、前署塩法道夏廷樾、署湘郷県知県朱孫詒、候選訓導羅沢南、



江忠淑らの統率のもと南昌へ派遣した<sup>72)</sup>。

こうして派遣された援軍のうち、7月4日に護九江鎮総兵羅玉斌の兵勇520名がまず南昌に到着した。そこで7日に江忠源は楚勇と九江兵、已革山東按察使徐思莊の率いる練勇（保信軍）など1,300名を順化門から出撃させた。また守備封九貴の率いる兵勇100余名は密かに章江門から城壁を降り、「往きて賊壘、賊船を焼く」という奇襲攻撃をかけた。しかし太平軍は数千名で応戦し、清軍は「衆寡敵さず、練勇は頗る傷亡あり」とあるように80名近い死傷者を出して後退した。また奇襲部隊も太平軍の「死を冒した抵抗」に遭い、作戦は失敗に終わった<sup>73)</sup>。

すると今度は太平軍が7月9日早朝に得勝門の西で地雷を爆発させた。城壁は20メートル近く崩れ、残った部分にも大きな亀裂が走った。また「爆音は城中に響き、黒煙が人の目を迷わると、該逆らは蜂擁として数千人が上ってきた」とあるように、多くの将兵が城内への突入を試みた。さらに「まさに城壁を爆破した時に、逆匪はまた隊を分けて各門を攻撲し、わが兵に防ぎきれないようにさせようとした」とあるように、爆破と同時に各城門に攻勢をかけて突入部隊を支援した。

だが江忠源と彼の弟である職員江忠濟はすぐに救援に向かい、「鏖戦すること一時の久しきにわたり、賊を殺すこと無数……、該逆は抵抗出来なくなり、ようやく敗走して屋内へ入った」とあるように太平軍の攻勢を押し戻した。また鄧仁堃、林福祥が練勇を率いて現場に到着し、「矢や石をものともせず督率して搶築」とあるように崩落部分の修理に取り組んだ。さらに楚勇の援護を受けて工事は続けられ、翌朝までには補修作業は完成した<sup>74)</sup>。

ここまでの戦いを見る限り、南昌の奇襲をめざした西征軍の戦略は江忠源の到着によって挫折したことがわかる。元々食糧の調達を任務の一つとしていたこの部隊は「賊はわずかに銅砲二門があるだけで、その無能はすでに概見できる」<sup>75)</sup>とあるように戦闘力は高くなかった。また軍の統率者だった頼漢英には決断力が不足していた。杜文瀾『平定粵匪紀略』は次のように述べている。

偽丞相の頼漢英が衆を率いて江西を犯した時、地雷一つを埋めて時間通りに爆発させ、城壁は数丈にわたって崩れた。群賊が準備万端でまさに登ろうとしたところ、漢英は二発目の地雷があると記憶違いをして、動かぬように戒めた。だが久しく待っても爆発は起きず、城壁はすでに塞がれた。群賊はみな彼の責任を咎めたが、漢英はなお信じず、偽土將軍の報告を読んで初めて深く後悔した<sup>76)</sup>。

この地雷攻撃が6月29日かそれ以後のものかは確定できないが、頼漢英の判断ミスから突撃のチャンスを逃してしまったことが窺われる。これに対して江忠源は「賊はもとより地雷に恃んで城を攻める。いまだ数日も出てこないのは、必ずやはかりごとがあるに違いない」<sup>77)</sup>と述べて林福祥らに補修用の資材を集めさせるなどの確な指示を出していた。こうした指揮

官の力量の違いが緒戦の結果に大きく影響したことは疑えない。

ところで西征軍の進撃に直面した江西社会の反応はどうであっただろうか。6月22日に太平軍が南康府（星子県）に接近すると、生員の胡愷儀たちは「賊が仇としているのは官だ。これを差し出せば心から従っていることになり、全城の禍を免れることが出来るぞ」<sup>78)</sup>と唱え、郷里の安全を確保するために上陸を始めた太平軍に「餽礼（贈り物）」をしたいと申し出て、彼らを先導して同善堂で対応を協議していた署知府恭安、署星子県知県羅雲錦を捕らえさせた。江西学政沈兆霖は「十六日（6月22日）の午刻に賊船が南門の外に至ると、いまだ上陸しないうちに住民が守令（恭安と羅雲錦）を献出した」「都司の胡瑤林は馬に乗って城を出ようとしたが、やはり住民に遮られて捕らえられ、賊船に送られた」「翌日賊船が出帆すると、住民で従う者がいた……。ことに情理の外であり、驚愕に堪えない」<sup>79)</sup>とあるように、住民たちが地方官を引き渡しただけでなく、太平軍に参加する者もいたと憤慨をこめて報じている。

また到着した太平軍に貢ぎ物を献げる「進貢」も盛んに行われた。豊城県では「県城では紛々と贈り物をした。銭、米、油、ロウソク、ブタ、ニワトリなど二度、一回は郷民から、もう一回は各店商の贈り物で、共に進貢と称した」とある。この時人々は「賊匪を大兵とか、漢兵と呼んだ」「黄色い紙に墨で『順』と書いて門に貼った」<sup>80)</sup>とあるように、排満主義を唱えた太平天国の主張を踏まえながら、恭順の姿勢を示して中立的な立場を取ろうと努めた。さらに「賊は遠くからの輸送に頼らず、郊外での略奪を行わなくとも、食糧は満ち足りて自由に手に入れることが出来た。加えて奸民が間に入って苛酷な取り立てを行い、自らを肥やそうとしたために、ついに進貢の議論は東の饒州、広信、南の撫州、建昌へ広がり、牛や酒が毎日のように届いた」<sup>81)</sup>とあるように、中間で利益を図る人々の思惑もあって進貢の風潮は広まった。

これに対して太平軍はいかなる態度を取ったのであろうか。鄒樹榮『藹青詩草』によると、進貢のため太平軍陣地を訪れた南昌郊外の人々は「相い見ると皆兄弟と呼び、甚だ親熱であった」と歓待を受けた。また太平軍は「答礼に棉花、油塩、衣服などの物を贈ったので、郷民はみな喜んだ」<sup>82)</sup>とあるように、彼らに十分な報酬を与えて支持を取り付けることも忘れなかった。次に清朝の地方官が逃亡した地域では「土匪の滋擾を禁ずる」楊秀清名義の告示が張り出された。実際に「土匪」の略奪に苦しんだ人々が太平軍に訴えると、「賊匪は兵を発して十余人を捕らえ、さらし首にしたために付近は安んじた」と治安の維持に努力したという。さらに清朝の官位を示す「旗匾を壊せ」との命令が各郷に伝えられると、科挙エリートを生んだ村では合格者の匾額を撤去したり、祠堂にあった官僚経験者の位牌を隠すことが行われた。

なお太平天国の宗教性に関する情報は、進貢を行った人々が太平軍から贈られた出版物によってもたらされた。毛隆保によると、その中には『天条書』『天父下凡詔書』『幼学詩』および『頒行曆書』があり、「天を天父皇上帝と呼び、おおむね盤古以来皆が天を敬っていた

のに……、秦漢からは天を敬うことを忘れてしまい、鬼道に入って閻羅妖に捕らえられた。今に至るやただ西洋だけがこの教えを奉じていると言っている」とあるように、上帝教の教義についてある程度正確な内容が伝わっていた。また「皇上帝は七日間で人や物を創造されたので、このため七日間を一週間とする」とキリスト教の影響が指摘されると共に、『幼学詩』は皆人に孝弟を尽くすように教えたもので、ただ最初の一、二頁だけが天主教の言葉である<sup>83)</sup>とあるように、その儒教的色彩についても言及されていた。さらに太平軍は「およそ庵堂や寺廟にある神像は、みな行って壊したり焼いたりした<sup>84)</sup>とあるように偶像破壊運動を行ったため、人々は神像を安全な場所へ移したり、家々の門の対聯や門神を取り去ったとある。

いっぽう清朝側は太平天国の苦戦ぶりを宣伝し、鎮圧に加わった者に厚い褒美を約束することで、人々を自分たちの陣営に踏みとどませようと必死であった。7月17日に張芾が江忠源、陳孚恩と連名で貼り出した告示は次のように述べている。

さて賊匪は江西へ逃げ戻り、大胆にも省城を攻めた。本官……らは兵勇を厳しく監督して防衛と討伐を行い、城外および付近に住む住民に心と力を合わせて賊匪を撃ち滅ぼすように諭した。逆匪が恃みとしているのは火箭を放ち、トンネルを掘ることに過ぎない。だが城内に火箭を放ったものの、一軒の家も焼くことが出来ず、風に煽られ戻った火で自ら賊営、賊船を焼いた。そのトンネル工事もわき水が出たために多くの匪が死亡し、倒れた家で圧死した者も数え切れない。初四日（7月9日）には地雷で城壁が爆破されたが、兵勇たちが救援に向かい、賊数百人を殺したうえ、わが軍には一人の死者もなかった。これは皆城内の兵民が目撃した事実であり、ここから逆匪が天の怒りに触れており、福主がわが江西を庇護して下さっていることがわかる。

昨日聞いたところによると、河南の賊（北伐軍をさす）は官兵に撃ち破られ、北へ向かうことが出来なかった。いますでに許州へ退いたが、賊衆は二千に満たない。南京や揚州はすでに奪回され、逆党は四散した。その江西に来た連中は食糧を奪おうとしているが、すでに懲らしめを受け、実に力量が尽きつつある。連日各地の大軍が雲集し、内外から挟み撃ちにしており、一撃のもとに殲滅することが出来よう。

ただし恐らく逆匪は弾圧を受けて四散するだろうから、なんじら郷民もすべからく肝を据え、心を合わせて協力し、互いに団練で自衛して、恐れてはならない。はたして能く村民を集め、長髪を一人殺した者には銀一百両を褒美として与える。短髪を一人殺した者は半額とする。さらに百名以上を殺した場合は、その団練の本年の錢糧を免除するように取り計らい、首事たる者には官職を与える。

本官……たちはただこの逆匪を殲滅し、一刻も早く閻閻を安んじることを願っており、どうして褒美を惜しんで約束を破ることがあろうか。さらにもう一つ勧めることがある。現在各地からの官兵はみな城外に駐屯しており、米、肉、薪、野菜の需要は大き

い。なんじらが速やかに運送して来れば、必ずや時価に照らして金を払い、厚い報酬を与える。くれぐれも足がすくんで進まず、後で後悔することがないように<sup>85)</sup>。

ここでまず張芾らは太平軍の戦術について、火矢とトンネルによる地雷攻撃のみと冷静に分析し、どちらも効果をあげていないと訴えている。また彼らは省外の戦局について触れ、北伐軍の一部が黄河を渡河できずに河南省許州へ向かったこと、南京および揚州が清軍に奪回されたことを指摘している。むろん後者は誤報であったが、National Archives に保存されている孫福謙の報告も「揚州がすでに克復されたか、あるいはなお余匪が残っているかは情報が錯綜している」<sup>86)</sup>と述べており、同様の流言が発生していたことを伝えている。さらに張芾らは人々に団練を結成して太平軍を殺すように命じたが、懸賞による士気の鼓舞は清軍兵士に対しても行われた。毛隆保によると、初め兵士たちは多くの首を持ち込んで褒美を得たが、それらは「郷民で髪はやや長い者を殺したか、長髪の者は婦人の首であった」といい、張芾が太平軍将兵の認識票（腰牌）を提出するように求めると、褒美を得る者はいなくなったという<sup>87)</sup>。これでは食糧を清軍陣地に持ち込む人々も「足がすくんで進まな」かったと推測される。ちなみに城内では太平軍の偶像破壊運動に対抗して、「巡撫が官紳を率いて福主、火神、城隍を迎え、徳勝門の城楼の上に奉じた」<sup>88)</sup>とあるように神像を城壁に安置することが行われた。檄文中に「福主がわが江西を庇護」とあるのはその影響と考えられる。

## 2. 南昌攻防戦の長期化と西征軍の撤退

### (a) 援軍の到着と戦況の膠着

7月中旬になると、清朝側は各地からの援軍が南昌に到着し始めた。7月16日に新任九江鎮総兵馬濟美が川勇240名を率いて城外へ至り、参将羅玉斌率いる九江兵と共に東北の永和門外に陣をしいた。また湖北から派遣された都司戴文蘭の兵が城西の章江門外に布陣し、都司楊煥章の率いる四川兵300名も入城して城壁の守備に当たった<sup>89)</sup>。

これに対して太平軍は小部隊で戴文蘭の陣地に牽制攻撃をかけた。すると江忠源らは7月20日に馬濟美と戴文蘭を出陣させ、城内からも鄧仁堃の練勇と広東勇に呼応させた。戦いは数時間にわたり、候補知府耆齡らが城内から砲撃を加えると、太平軍は多くの死傷者を出して後退した。また戴文蘭らは城西の太平軍陣地を攻めたが、清軍側も80名以上の死傷者を出して撤退した<sup>90)</sup>。

7月28日に頼漢英らは再度地雷による城壁の破壊を試みた。まず前回爆破された得勝門の西で最初の爆発があり、江忠済と已革総兵清保が楚勇を率いて救援に向かうと、崩落現場の右側で2度目の爆発が起き、清保は負傷した。また太平軍は火薬を入れた包みを投げ入れ、楚勇数十名を負傷させたが、江忠済は太平軍の攻勢を押し返した。彼らが城壁の修理をしていると、前回の城壁爆破地点の東側で3発目の地雷が爆発した。黒煙が上がり、城壁は十数メートルにわたり崩落したが、九江兵と鄧仁堃の練勇が救援に駆けつけた。さらに江

忠源も到着して陣頭指揮を取り、城外にいた馬濟美、戴文蘭の軍が内外から挟み撃ちにして太平軍の攻撃をしりぞけたという。

この日の戦いについて張芾は「この逆匪は三カ所で同時に地雷を爆発させた。爆破した城壁は二カ所、十五丈余りに及び、前回に比べても情勢は危険であった」<sup>91)</sup>と述べると共に、楚勇の死傷者が200名を超えたと報じた。彭旭も「楚勇の死傷が余りに激しかった」<sup>92)</sup>ために、戴文蘭の兵と開化勇、撫州兵を入城させて兵力を補充したと語っている。

清軍の抵抗力が落ちていると見た太平軍は、翌29日に数千名で永和門外の九江兵陣地を襲った。江忠源は「堅守して出るなかれ」と命じたが、馬濟美はこれを聞き入れず、自ら兵を率いて敵陣に斬り込んだ。だが「不意に樹林の中に伏せていた多くの賊が姿を見せて抵抗」すると、包囲された馬濟美は「身に矛傷を受け」<sup>93)</sup>て戦死した。

彭旭によれば、数日前に馬濟美は戦略をめぐって江忠源らと衝突し、張芾は彼を弾劾するつもりでいたという<sup>94)</sup>。また李濱『中興別記』は「城内の軍は安逸で、城外の軍は苦労したにもかかわらず、褒賞は城内に篤く城外に薄かったため、奇功を立てようとした」とあるように、城外に布陣していた馬濟美は褒美の少ないことに不満を持ち、太平軍陣地を攻撃するように求めたが、張芾に自重するよう諭されて「大いに憤った」<sup>95)</sup>と述べている。到着した援軍と守備隊の関係も矛盾をはらんでいたことが窺われる。

ところで援軍を要請したのは清軍の守備隊ばかりではなかった。頼漢英も「金陵に救援を乞い、意図は死闘にあった」<sup>96)</sup>とあるように援軍の派遣を求めており、7月下旬に安徽巡撫李嘉端は「江面では時に賊船の帆を揚げて直上するものがある」と述べたうえで、「江寧へ戻って賊に戦いを助けるように求め、彼を安慶に派遣して官兵の数を探ろうとした」<sup>97)</sup>密偵の楊恩海を捕らえたと報じた。また張芾は「この逆匪はすでに施すべき計略がなく、他所へ逃げるのでなければ、遠く金陵の賊に応援に来るように求めている。連日届いた知らせでは、時折下流で賊船が数十隻あるいは十余隻おり、風に乗って上流へ向かっている」<sup>98)</sup>とあるように、太平軍の増援軍が小部隊に分かれて江西へ向かっていると報じていた。

この太平軍の援軍は国宗石祥貞（翼王石達開の兄）<sup>99)</sup>、国宗韋志俊（北王韋昌輝の弟）<sup>100)</sup>が率いる部隊であった。その兵力について張亮基は「前月二十四日（7月29日）に賊匪はまた大船が千隻、湖口から江西へ入り、賊は二万人いると言っていた。これと現在江西省城を攻めている賊を合わせると、まさに二、三万人は下らない」<sup>101)</sup>と述べたが、その数字を鵜呑みにすることは出来ない。すでに杜徳風氏、朱哲芳氏が検討したように、7月末から8月初めにかけて南昌に到着した援軍は「数十隻」「賊艘数百」<sup>102)</sup>あるいは「賊船五百余隻」という規模で、7月27日に湖口県を攻めたが占領できなかった<sup>103)</sup>。また「果たして二十八、九日（8月2日、3日）に省に到着して停泊したものの、ついで上游へ赴いた」<sup>104)</sup>「三十日（8月4日）に賊船は西岸から紛々と逃げ出したが、砲の力が及ばなかったため、各軍はこれまで通り陣地を固守した」<sup>105)</sup>とあるように、南昌到着後まもなく移動してしまい、攻城軍の兵力増強とはならなかったようである。

その後も太平天国側の援軍派遣は続き、8月16日、17日には「賊船二百四十余隻」が南京を出発した。だが向荣によると「この賊は十ヶ軍と言っていたが、みな鎮江、揚州で脅されて従った者か、金陵の奸民で利益を図り賊と密かに通じて交易していた者で、迫られて乗船した者が約二千余人、その中で本当の長髪賊は船一隻に二人に過ぎず、いたずらに船を多くして勢いよく見せているに過ぎない」<sup>106)</sup>とあるように、2,000名ほどの兵力で戦闘力は高くなかった。さらに9月に入ると翼王石達開が自ら600余隻、5-6,000人の兵力を率いて南京から安慶へ向かったが<sup>107)</sup>、この時すでに頼漢英らは南昌を撤退していた。同じ頃懷慶を包囲していた北伐軍にも援軍は送られておらず、当時の太平天国にはみずから広げた戦線に効果的な援軍を派遣する余力はなかったと言えよう<sup>108)</sup>。

さて多くの援軍が望めない中、南昌攻撃軍は次第に守勢に回った。これを見た江忠源らは8月5日に湖南から呼び戻した贛南鎮総兵阿隆阿の率いる兵勇を城東の永和門から出撃させ、徐思莊、鄧仁堃、林福祥の壮勇にこれを支援させた。また彼らは「敢死の士（決死隊）」を城西の章江門から派遣し、文孝廟にある太平軍陣地を焼き払おうと試みた。だが折から続いていた雨で「水が深く溜まり、火を放つことが出来なかった」「賊の鎗炮が雨のように注ぎ、動けば餌食となった。百長の李春富が戦死し、残りも多くは壁際に伏せて、少しも打撃を与えることは出来なかった」<sup>109)</sup>とあるように攻撃は失敗した。

また8月12日に数百人の太平軍兵士が城南の進賢門外にある京家山に姿を見せ、陣地の構築を試みた。彼らの「意図は官軍の糧道を阻む」<sup>110)</sup>ことにあると見た江忠源は、兵を派遣してこれを駆逐した。続く13日には南京から派遣された音徳布の兵1,200名が南昌に到着した<sup>111)</sup>。さらに21日には夏廷樾、朱孫詒、羅沢南率いる湘勇2,000名、湖南兵600名も姿を見せ、共に永和門外に駐屯した。

そこで8月28日に江忠源らは7手に分かれて攻撃をかけた。音徳布の雲南兵、羅沢南の湘勇など2,800名は七里街の太平軍陣地を攻撃し、「[羅] 沢南は大変勇敢で……、叫び声は天地を震わせ、兵士たちは殊に死戦した」と言われた。だが彼らが太平軍の軍船を焼き、陣地を破壊していると、太平軍の伏兵が陣地の右後方から攻撃をかけ、「わが兵は持ちこたえられなくなった」<sup>112)</sup>とあるように清軍は敗走した。とくに戦闘中に清軍の衣装を着、清軍の幟をたてた数十名の兵士が現れ、「岷帥（江忠源をさす）の援軍である」と名のつた。その実彼らは清軍を装った太平軍將兵で、湘勇が発砲を控えていると「にわかにならば格殺したため、わが軍は鳥獸のように散じた」<sup>113)</sup>とある。結局この戦いで太平軍の死者は400名、清軍の死者も500名に及んだ。とくに湘勇の犠牲者は81名にのぼり、七品軍功の易良幹、羅信東、童生の羅鎮南、生員の謝邦翰らが戦死したという<sup>114)</sup>。

この戦いは形成途上にあった湘軍にとって初めての省外への遠征であった。湘勇敗北の知らせを受けた曾國藩は、駱秉章に宛てた書簡で「六月の江西援助の戦いでは、募集したばかりの兵は一日の訓練も受けておらず、江西で力を出すことが出来なかったのであり、今も後悔している」<sup>115)</sup>とあるように、その敗因を兵の訓練不足に求めた。だが王闔運『湘軍志』に

よると、このとき曾国藩は「果たして湘勇は役に立つと考えた。敗れたとはいえ深入りしたのであり、官兵には出来ないことだったからである」と述べている。さらに彼は兵の増強を求めていた江忠源に次のように書き送ったという。

今日極めて憎むべきは、兵が敗れても互いに救わないことである。およそ動員された当初は兵一千名を召集しても、数営から数十営を選んで抜き出すうちに、兵卒が知らない者同士となるばかりか、統率する将校も日頃面倒を見ている者とは異なり、ついには互いにまとまることが出来なくなる。兵と壮勇が会えば、さらに恨み憎しみ合うようになり、桂東の戦いでは三廳兵が湘勇を市場で殺した。江西の戦いでも鎮守兵が三江口で湘勇を殺し、重傷者が十余人出た。今日の軍営の雰囲気と派遣に関する既存の方法では、聖人でもその心を一つにすることは出来ないだろう<sup>116)</sup>。

ここで曾国藩は清軍の問題点が結束力の欠如による連携の悪さにあると述べ、将校と兵士の関係が疎遠であるばかりか、兵士と壮勇の内紛が絶えないと指摘している。「桂東の戦い」とは湖南桂東県に進入した江西上猶県の劉洪義反乱に対する鎮圧作戦のことで、羅沢南は夏廷樾と共に湖南東部の反乱軍鎮圧に当たっていた<sup>117)</sup>。また兵勇間の争いは8月19日に豊城県の三江口鎮で発生したが<sup>118)</sup>、長沙における湘勇の訓練中にも同様の事件が起きた。長沙協副将清徳は湘勇との共同演習を嫌い、これに加わった参将塔齐布を湖南提督鮑起豹に讒言した。その結果演習が中止になると「兵と勇は齟齬して相能わず」と両者の対立が深まり、たまたま湘勇の放った銃弾が撫標兵の使用人を傷つけると、撫標兵は「ほら貝を吹き、旗を揺らして湘勇を攻めた」<sup>119)</sup>とあるように抗争に発展した。

湘軍の創設にあたって、曾国藩が清軍の弊害を除去するために職業軍人を用いず、「ただ書生を用いて哨官とした」とあるように下層知識人を将校として兵士を統率させたことはよく知られている。しかし当初これらの試みは理解されず、楚勇の増援部隊を率いた江忠淑は「その家の軍が勁旅と称していることにこだわり、心の中で曾公（国藩）を臆病と笑った」<sup>120)</sup>とあるように曾国藩の意見を軽んじ、行軍時に十分な偵察を行い、湘勇と行動を共にせよとの指示に従わなかった。その結果楚勇1,000名は8月5日に単独で瑞州郊外の光義市に着いたところ太平軍の別働隊と遭遇し、船を撃沈されて義寧州へ敗走した<sup>121)</sup>。また湘勇の損害の大きさを見た江忠源は「新軍は役に立たないと考え、これを吉安に派遣して土寇を撃たせた」<sup>122)</sup>とあるように、羅沢南や翰林院庶吉士郭嵩燾、候選知県劉長佑らの軍を9月に吉安府城を攻撃した泰和县反乱軍の弾圧に振り向けた。

なお曾国藩は江忠源の楚勇について、南昌戦役後の10月に次のように述べている。

江氏の勇は名前こそ新寧であるが、実は貴州、四川、衡[州]、永[州]、郴[州]、桂[陽州]などの人間が混じっている。彼らの見聞は日に広くなり、数千金の褒美や

五、六品の官位でも慣れてしまって驚かない。その驕り高ぶる風潮は、すこぶる統率しがたい。これまで彼らは特に岷樵（江忠源をさす）を恐れ、あえて乱暴なことはしなかった。だが本当に岷老に二十四日（10月26日）のような話があれば……、強悍となってほしいままに事件を起こすだろう<sup>123)</sup>。

ここで曾國藩は楚勇が実際には各地出身者の寄せ集めで、長期の従軍によって少々の褒美では満足しなくなり、統率が難しくなると指摘している。また「二十四日のような話」とは江忠源が「賞銀を侵吞」したという噂が広がり、江西で十分な報償を得られなかったことに不満な楚勇が湖南帰還後に長沙の巡撫衙門に押しかけ、江忠源の使用人を殺傷した事件をさす。さらに江忠源の兵勇に対する統制が厳しかったことはすでに指摘したが、その手法は「恣意に斬殺」という手荒なもので、城壁の上と下で話をしていた兄弟が軍律違反で殺されたり、街角で「賊の城攻めは甚だ急だ」と呟いただけで「軍心を揺乱」した罪で処刑される者も出た。毛隆保は夏廷樾の到着後、江忠源の独断専行はいささか減ったと述べると共に、「彼の兵は最も勝手放題で、城内で家を壊したり、もめ事を起こしたのは全て彼の兵であった。だが省城を防衛できたのも彼の兵の力によるところが大きかった」<sup>124)</sup>とあるように、楚勇の功罪が相半ばするものであったと評している。

28日の戦いの後、なお数日間は双方の陣地から出撃がくり返されたが、勝負はつかないまま戦況は膠着した。太平軍は「立て籠もって出でず、ただ壁の穴から槍炮を放つだけ」とあるように、兵力不足のため攻勢をかけることはできなくなった。また清軍も「城外の三面はみな水であり……、一度総攻撃をかければ、必ずや帆を揚げて他へ逃れてしまう」<sup>125)</sup>と言われたように、船舶がないために攻撃の主導権を握ることが出来なかった。

ちなみに毛隆保によると、太平軍將兵は清兵を「妖兵」と呼び、清軍の兵勇は太平軍を「蛮子」と呼んで互いに恐れた。また両軍の陣地は叫べば声が届くほどの近さで、「賊は多くが楚人、勇もまた多くが楚人」とあるように両軍共に湖南出身者が多かった。このため太平軍將兵は湖南訛りで「郷親よ！お前さんはそちらで一日たったの二百錢、何事も思い通りにならない。こっちへ来れば何でも手に入るぞ！」と呼びかけた。すると楚勇、湘勇は「郷親よ！おいらはとても苦しく、金もない。お前さんの首を貸してくれ！そうすりゃ五十両の褒美が出るぜ！」<sup>126)</sup>とやり返したとある。別稿で指摘したように、永安州時代の太平軍將兵は清軍陣地の潮州勇と客家語で言葉を交わし、交易を行った。いまや前線の太平軍では広西、広東人の数が減り、湖南人がその中心となっていたことがわかる。

## (b) 曾天養の遊撃戦と呼応勢力、西征軍の南昌撤退

さて南昌攻撃が手詰まりとなっている間、太平軍は曾天養の率いる部隊を水路で南昌近郊の各県へ向かわせた。曾天養はまず8月5日に豊城県を占領し、「監獄を開放して、倉庫を劫擄」<sup>127)</sup>した。6日には光義市で江忠淑率いる楚勇を撃破し、清軍の守備隊が救援に向かっ



た際に瑞州府城を占領した<sup>128)</sup>。8月12日に一度南昌へ引き上げた曾天養は、17日には鄱陽湖東岸の饒州を襲って鄱陽県知県沈衍慶、樂平県知県李仁元を殺害した。そして8月28日に東進して樂平県城を陥落させると<sup>129)</sup>、9月8日には北へ向きを変えて景德鎮を、翌9日に浮梁県をそれぞれ占領した<sup>130)</sup>。

この曾天養の作戦活動がめざしたものが、西征の当初の目的である食糧の調達にあったことは疑いない。彼らが豊城県城の倉庫に貯蔵されていた前年の漕米5-6万石を獲得し、これを「舟中へ運び入れ、省（南昌）へ送って兵の食糧にあてた」のはその一例である。瑞州でも「賊は瑞[州]にいること五日、その輜重を尽く載せて省に入った」<sup>131)</sup>とあるように、清軍の物資を奪取して南昌へ運んだという。

この時豊城県にいた毛隆保によると、太平軍は入城に先立って「住民は恐れるな。大兵の至るところ、秋毫も犯さない」という布告を張りだした。果たして入城した太平軍は「僅か数人を殺しただけだったが、搜劫は至らぬ場所はなかった」とあるように徹底した家宅捜索を行い、「大街の舗戸は一人として免れた者はいなかった」とある。

また太平軍は「郷間もいまだ十分に害に遭わず」とあるように、一カ所の駐屯時間が短かったために農村部に入ることをしなかった。ただし彼らは「土匪を訪ねて引導としたため、故に各富戸を知っていた」とあるように地元の協力者から情報を収集し、県内屈指の富豪であった周姓、陸姓について「禍に遭うこと最も甚だしい」<sup>132)</sup>という徹底した掠奪を行った。こうしたやり方は『賊情彙纂』に「打先鋒」として紹介されたもので、「無頼の民」を手なづけ、「富戸の奸佃や劣僕」を抱き込むために「瓦や溝に隠した金、水や池に沈めた銀もまた[掠奪を]免れることは出来ない」<sup>133)</sup>と言われた。毛隆保も豊城県の出身で守備職にあった李聯鑣の家について「族匪が賊匪を手引きして彼の家に至り、衣物を奪い去った」<sup>134)</sup>とあるように、同族内の貧困な成員が太平軍に協力したと記している。

さて南昌までの過程がそうであったように、人々は曾天養軍の活動に様々な反応を見せた。まず彼らが樂平県へ進攻すると、「土匪がすでに『城を献げる』との議論を唱え、文武の官員は先に逃げ出した。土匪はその城に入り、賊が至ると倉庫の穀物や漕米の所在を教え、饒州へ送るのを手伝った」とあるように、地元の反体制勢力が呼応して食糧の調達、輸送に協力した。その途中で曾天養軍が石鎮市を通りかかると、商人たちは米1,000石、銭2,000串を用意して「師を犒」い、貢ぎ物を饒州に送り届けたために、衣服の提供を求められただけで掠奪を免れた。これを見た余乾県の人々は城工局から米1,000石、銭2,000串を借り出し、「余乾県進貢」と書かれた旗幟を立てて饒州へ送った。地方官はその事実を知っていたが、太平軍の攻撃を免れればと考えて黙認したという<sup>135)</sup>。

こうした事例は曾天養軍が到達しなかった地域でも見られ、臨江府の樟樹鎮では監生の徐遇春が「倡言して人々を惑わし、銭米を差し出させて、省（南昌）へ行って賊に贈った。また偽示を与えられて貼りだした」<sup>136)</sup>と告発された。また豊城県では「郷間の土匪で劇団の衣服を着て太平王を名のる者がいた」「賊匪が去った後、土匪がほしいままに富家巨室を掠奪

し、家捜しをして何も残さなかった」<sup>137)</sup>とあるように、太平軍の退出後に地元の反乱勢力が激しい掠奪を行った。

さらに興味深いのは景德鎮の事例で、太平軍が南昌を囲むと「都昌の饔戸」が中心となって800名の練勇を組織した。都昌会館の董事たちは饒州に進出した太平軍と連絡を取り、商人たちに貢ぎ物を用意させたが、練勇たちは「分劫の計」を立てて貢ぎ物を奪って逃走した。食糧を手に入れられなかった太平軍は怒り、郊外で掠奪を始めたが、たまたま李村で村人の抵抗に遭って将校が殺された。すると「都昌会中の匪」が太平軍の報復攻撃に加わり、「焚掠すること無算」<sup>138)</sup>とあるように激しい掠奪を行ったという。

このように西征軍が進出した江西では太平軍に呼応するか、自らの利益のために利用しようとする勢力が多く現れた。饒州で太平軍に殺された知県沈衍慶は、1853年前半の書簡の中で次のように述べている

饒郡は商人が集まる場所で、善人も悪人も雑居している。その最も悪賢い者は米の運搬船の水手で、械闘や強奪に慣れている。地方官は恩威を併用して、弾圧して反乱が起きないようにしてきた……。不意に九江が陥落した後、漕運は停止され、衣食の源はついに絶え、分を越えたことを望む気持ちがにわかに生まれた。一度賊船が東へ向かったと聞くと、災禍を幸いとして楽しむ心を抑えられず、外盗を招いて内訌を起こそうと願った。偽言の争いは実にこれを原因として始まったのである。

ここで沈衍慶は饒州が流通の要所であり、漕運労働者などの下層民を多く抱えていたこと、太平天国の長江流域進出で漕米の輸送が滞り、失業した労働者に不穏な動きが生まれたことを指摘している。また「偽言の争い」とは2月に彼らが「太平軍が饒州へ進攻する」というデマを流し、住民が避難した際に掠奪を働こうとした事件のことで、沈衍慶は犯人を捕らえ、軽拳妄動を慎むように人々を諭すと共に、「糧船の水手を義勇に召募」<sup>139)</sup>することで事態の沈静化を図ったという。

19世紀前半の江西は「擔匪」と呼ばれる武装集団の活動がしばしば報告され、天地会系結社の活動も盛んだった。1852年12月に辺銭会の首領だった李運紅（崇仁県人）は、江西の清軍が太平天国弾圧のために湖南へ動員されている隙について都督大元帥を名のり、「西匪（太平軍）の名に仮託して、『銭米を出して援助すれば被害を受けない』と住民を諭した偽示を捏造し、これを貼って煽惑した」<sup>140)</sup>とあるように、太平軍の名義を用いて人々に物資を供出させて蜂起した。また1853年5月に上猶県鷲形墟で蜂起し、湖南桂東県城を攻撃して湘勇の弾圧を受けた劉洪義（龍泉県人）は、「ついに畏志が萌し、旗を立てて天徳王を名のった」<sup>141)</sup>とあるように、太平天国が宣伝した天地会のシンボルであった天徳王の名のって抵抗した。

だがこれらの反体制勢力よりも、江西社会の太平天国に対する反応を特徴づけたのは漕米

や土地税の負担をめぐる訴訟、紛争であった。これを示す事件として 1853 年 7 月に泰和県で発生した鄒恩隆らの反乱が挙げられる。鄒恩隆は湖南瀏陽県から県南の東沔峒に入植した移民で、「符術をもって人を惑」わし、太平軍が南昌進出の知らせが届くと数十人を率いて県城を占拠した。天候不順のため飢えた人々が彼に従うと、8 月に彼らは万安県城を陥落させ、翌 9 月には吉安府城を攻撃して知府王本梧を戦死させた。さらに「土匪」の蕭燮幫が安福県城を襲って呼応したという<sup>142)</sup>。

鄒恩隆は「齋匪」<sup>143)</sup>すなわち道光年間の湖南で急速に勢力を伸ばした青蓮教系結社のメンバーであったと言われるが、いっぽうで「この土匪は昨年冬に泰和県の四、五両都が鬧漕した事件の余党であり、湖南、広東および本省の万安、興国等県の匪徒と結んで、人々を集めて騒ぎを起こした」<sup>144)</sup>とあるように、この反乱には 1852 年に漕米の不払い運動を起こした人々が参加していた。この年 12 月に漕米の徴収が始まると、五都の「棍徒」であった蕭同連らが泰和県の衙門に押しかけ、「今年の漕米徴収は我々が定めた章程に照らして行うべきだ」と主張して署知県王宇英と言い争った。王宇英が蕭同連を捕らえると、翌日副貢の蕭雨らの率いる群衆が県衙門を襲撃し、役所に放火して蕭同連を奪い返した。さらに彼らは漕書劉啓陶の家と城内にあった添和鼎の銭店を襲ったという<sup>145)</sup>。

鄒恩隆反乱軍が吉安府城を包囲すると、彼らが南昌の太平軍に連携することを恐れた江忠源は湘勇、楚勇を弾圧に派遣した<sup>146)</sup>。だが当時の江西では他にも漕米の負担などに抵抗する事件が発生しており、1852 年 10 月には貴溪県で劉城漳らが漕米の徴収時に質の悪い米を収めようとして失敗し、人々を率いて清軍と衝突した<sup>147)</sup>。また南豊県では 1848 年に劉煜（捐納職員から元知府）が漕米の代納にかかる費用を軽減したい「郷民」の要請を受け、「清漕」を唱えて饒梅（監生）らと公局を設立し、それまで代納を担当していた有力者たちを「紳棍」として告発した<sup>148)</sup>。さらに星子県でも 1852 年 5 月に銀価が 1 両あたり銭 2700 文まで高騰したことに不満を抱いた程桂馥が、糧房総書の徐從新と口論となり、人々と彼の家を打ち壊して捕らえられた<sup>149)</sup>。

こうした人々の不満は、当時の中国社会で普遍的に見られた現象だった。1853 年 10 月に吏科給事中の雷維翰は「各省の貪官汚吏が良民を激変させ、毎回抗糧事件を名目に民に解けない無実の罪を着せている」と告発して次のように述べている。

外官の積習は税を厳しく取り立てて飽くことを知らぬことにあり、正規の税の他にも規則に違反して苛酷に搾り取っている。その弊害は州県が行っているが、発端は大吏が作っている。毎年の漕米徴収では漕規を取り立て、斛を受け取るのに手数料を取り、催促を委ねるのにも手数料を取り、管轄の大官や同城の文武員弁がみな手数料を取る。その利益は州県よりも多く、委員で任務を引き継ぐ者は省城の事務員に賄賂を送らなければ着任して漕米を徴収することが出来ない。もしこの者が賄賂でこのポストを手に入れたなら、何を憚ることがあろうか。おのずから必ずや輪をかけて搾取し、民からむしり

取っておのれを肥やすのである。

もし清廉潔白な上司がいて、規定の手数料を取らなくとも、不肖の州県は漕米徴収を利益の源と考え、悪習は固く積み重なって破ることができない。小民には米一石を納めるべきところ二石を余分に取られる者がいる。また郷民で米を倉に運んだが納税を拒否され、銀で支払うように迫られる者もいる。さらには銀で払ったにもかかわらず、余分に払うように求められる者もいる。少しでも意に沿わないと抗糧だ、反逆だと騒ぎたて、兵役を率いて鎗炮を放ち、郷村を騒がせては人々の家を焼く。このため民の怒りは沸騰し、反乱が発生する。近來の外省で人々が集まって地方官を殺害する事件が多発しているのは、概ねこのような事情によるのである<sup>150)</sup>。

ここで雷維翰は地方官が漕米の徴収などで不当に付加税を取り立てているが、その原因は州県レベルに留まらない構造的な腐敗にあると指摘している。その利益を享受しているのは省城にいる長官クラスから武官、事務員まで広範にわたり、項目も多岐にわたっていた。しかも官界で賄賂が横行しているため、一人二人の清廉な官吏によって悪習は解決出来ない。地方官は上司の意図に関わりなく苛斂誅求を行っており、漕米徴収や租税の不払いで地方官が殺される事件が多発しているのは、武力行使を厭わぬ強圧的な統治がもたらした結果なのだと主張している。

こうした現象は西征軍が活動した揚子江中流域に共通して見られたもので、その故にこそ湖北巡撫となった胡林翼が漕政の改革に乗り出すことになった。だが南昌を攻撃した太平軍の主な任務が食糧の調達にあり、地域経営に乗り出す意志を持っていなかった以上、これら清朝の圧政に苦しむ人々の期待に応える術はなかった。江西各地を転戦した曾天養軍は9月17日に饒州から都昌県へ入り、彭沢県から建徳県を経て安慶へ向かった<sup>151)</sup>。また南昌にいた頼漢英らの本隊は、清軍守備隊が城内から掘り出した「二、三千斤の大砲十余位」による砲撃を受け、24日に南昌を撤退して北へ向かった。だが張芾が「わが軍は船がないため、流れに従って追尾することが出来なかった」<sup>152)</sup>と報じたように、清朝側は水軍を欠いていたために追撃することが出来なかった。この水軍創設の必要性は9月初めに江忠源も力説しており<sup>153)</sup>、清朝も両広総督葉名琛、四川総督裕瑞らに洋式大砲を搭載した軍船の建造を命じることになる<sup>154)</sup>。

## 小 結

本稿は太平天国の西征史のうち、その開始から南昌攻撃までの部分について分析を加えた。太平天国の西征は北京攻略を目標とした北伐とは異なり、南京の人口を支えるための食糧の調達を第一の任務として始まった。また防備の手薄な揚子江中流域に出兵することで南京周辺の清軍を牽制すると共に、北伐軍の活動を有利にするという意図も込められていた。このため南昌攻撃に参加した兵力は数千人と少なく、装備の面でも充実していた訳ではなか

った。これに対して南昌の清軍守備隊は5,000人程度であったが、江忠源が救援にかけつけたことで防衛体制が強化され、奇襲によって南昌の占領をめざしていた頼漢英らのもくろみは外れた。

南昌城外に陣をしいた西征軍は、トンネルによる地雷攻撃で度々城内への突入を図った。だが楚勇の抵抗によって阻まれ、太平軍側の不手際もあって城は陥落しなかった。また西征軍が進出すると、江西の人々は清朝の地方官を捕らえ、貢ぎ物を献げるなど自らの安全を図って中立的な態度を見せた。これに対して太平軍は宗教書を頒布したり、治安の維持に努めるなどの行動で応えたが、当時の太平軍には地域支配を行う意志がなく、郷官の設置によって安定的な支持を取り付ける努力は行われなかった。

さて南昌城での攻防戦が展開している間、清軍は各地からの援軍が到着し始めた。これらの部隊の中には功を焦って戦死した総兵馬濟美の例もあり、各軍は必ずしも緊密な連携を取っていた訳ではなかった。だが曾国藩が湖南で編制途上にあった湘勇を派遣すると、犠牲を出しながらも戦果を上げた。太平軍は膠着した戦況を打開するべく、曾天養が江西各地を転戦して食糧の調達に努めた。彼らの進撃にも呼応する勢力は多くあり、とくに漕米の徴収や土地税の負担、中国官界の構造的な腐敗に苦しんでいた人々起こした反乱は清朝側らを慌てさせた。だが太平軍はこれらの反乱軍を糾合することが出来ないまま江西を一度退出した。

こうして見ると、西征の開始は太平天国、清朝の双方に対して大きな課題を投げかけたと言えるであろう。清軍がまず直面したのは水軍の不足であり、江忠源の提言によって清朝側（とくに曾国藩）はその編制に取り組んだ。また清朝が人々の支持を取り戻すためには漕政を初めとする税制改革が不可欠であることが明らかとなり、同じ揚子江中流域の湖北で胡林翼がその課題に取り組むことになった。さらに太平天国は南京の上流にあたるこの地域をどのように経営していくかというヴィジョンが欠けていた。その後湘軍の圧力に対する軍事的要請が高まると、江西へ再進出した石達開が中心となって郷官の設置と旧来通りの徴税を行う制度を模索することになった。

南昌退出後の西征軍が九江を占領し、湖北へ進出する過程と安徽における戦線の拡大については、別の機会に詳述することにした。

## 註

- 1) 菊池秀明『広西移民社会と太平天国』本文編、風響社、1998年。
- 2) 菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、2008年。
- 3) 菊池秀明「太平天国における不寛容——もう一つの近代ヨーロッパ受容」（『岩波講座・東アジア近現代通史』1、岩波書店、2010年、300頁）。
- 4) 簡又文『太平天国全史』中冊、猛進書屋、1962年。
- 5) 中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』1-26、光明日報出版社および中国社会科学文献出版社、1990-2001年（以下『鎮圧』と略記）。
- 6) 朱哲芳『太平天国西征史』広西人民出版社、1997年。

- 7) 崔之清主編『太平天国戦争前史』2、戦略発展、南京大学出版社、2002年。
- 8) 杜徳風編『太平軍在江西史料』江西人民出版社、1988年。杜徳風「一八五三年太平軍進攻南昌之役」(北京太平天国史研究会編『太平天国学刊』1、中華書局、1983年、105頁)。
- 9) 徐川一『太平天国安徽省史稿』安徽人民出版社、1991年。
- 10) 向荣奏、咸豊三年五月初四日『鎮圧』7、26頁。張芾によると、この時向荣の子である向継雄が太平軍に敗北し、九江に退いた(張芾奏、咸豊三年五月初七日『鎮圧』7、64頁)とある。だが実際には向継雄らの兵力は少なく、本格的な戦闘はなかった(向荣奏、咸豊三年六月初八日『鎮圧』7、547頁)。また李嘉端は3日に西江口で「向荣の水師」が太平軍に砲撃を加えたが、太平軍は反撃せずに上流へ向かったと述べている(同奏、咸豊三年五月初四日『鎮圧』7、32頁)。
- 11) 李嘉端奏、咸豊三年五月初十日『鎮圧』7、93頁。なお李嘉端によると、安慶の清軍は先の陥落後に再編成が行われたが「防守者不足千人……、兵多未練、器亦未全」とあるように戦力が整っていなかった。このため「賊船乗風直撲城下、開放大砲攻城、我兵抵禦不住、漸次逃散」とあるように戦いが始まると逃亡者が続出し、李嘉端もやむなく安慶城から数キロ北の集賢関に退いた。
- 12) 李嘉端奏、咸豊三年五月十八日『鎮圧』7、236頁。なお太平軍の退出後、李嘉端は入城して「安民緝匪」を行ったが、住む場所がなく、蕪湖方面から太平軍の後続部隊が接近してきたため再び集賢関に退いた。以後安慶の河面には太平軍の軍船が停泊し、太平軍水師の「客館」になったという(方宗誠『俟命録』自序之三、徐川一『太平天国安徽省史稿』55頁)。
- 13) 簡又文は西征軍派遣の目的を「経営皖贛」と述べている(『太平天国全史』中冊、965頁)。また西征が「戦略上の失策」であったとする意見もある(張一文「太平天国前期戦争の戦略問題」、中華書局近代史編輯室編『太平天国史學術討論會論文選集』2、中華書局、1981年、370頁)。
- 14) 崔之清主編『太平天国戦争前史』2、戦略発展、861頁。
- 15) 同治『彭澤県志』巻18、軍衛。
- 16) 同治『湖口県志』巻5、武備志、軍務始末・団練附。
- 17) 彭旭『江西守城日記』(太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』2、中華書局、1961年、391頁)。ちなみに先の向荣の上奏では、他に「数十号」「百余号」の船がいたと述べているが、これが何をさすのかは不明である(向荣奏、咸豊三年五月初四日『鎮圧』7、26頁)。
- 18) 張徳堅『賊情彙纂』巻8、偽文告下、偽船牌式によると、両司馬胡元志が「管長」だった船には「聖兵」が6名、「牌尾」が3名乗っていた。また燕王秦日綱が長江の巡査に派遣した典油塩汪大元の船には兵士35名、水手8名が乗ったという(中国近代史資料叢刊『太平天国』3、神州国光社、1952年、239頁)。羅爾綱氏は当時太平軍の水営には砲船、軍船、坐船、輻重船といった区別がなく、船の大小もまちまちで戦闘力は低かったと述べている(『太平天国史』第2冊、中華書局、1084頁)。
- 19) 向荣奏、咸豊三年五月初四日『鎮圧』7、26頁。
- 20) 同治『新建県志』巻65、兵氛。
- 21) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、61頁。
- 22) 李濱『中興別記』巻7に「(咸豊三年四月)辛丑、賊楊秀清遣偽豫王胡以暘等回竄安慶、偽丞相頼漢英等回竄江西、各乘船泝江」とある(太平天国歴史博物館編『太平天国資料匯編』第2冊上、中華書局、1979年、116頁)。簡又文氏は郭廷以『太平天国史事日誌』の記事を参考に、胡以暘が西征軍の総帥であると述べ、朱哲芳氏、崔之清氏もこの見解を踏襲しているが、その実『中興別記』の記事は胡以暘、頼漢英の軍が安徽、江西へそれぞれ派遣されたようにも読める。

- 張徳堅『賊情彙纂』卷1、劇賊姓名上も「癸丑四月、楊秀清遣〔胡〕以眇犯安徽桐城県之集賢関、破官兵營盤九座」とだけ述べており、彼が西征軍の総司令官であるとは述べていない（『太平天国』3、50頁）。さらに王定安『湘軍記』は「偽丞相頼漢英、石祥貞犯九江湖口、偽豫王胡以眇陷安慶爲声援」とあり、胡以眇の軍を別働隊として扱っている（巻4、援守江西上篇）。このように史実を確定し難いところに西征史研究の難しさがある。
- 23) 張徳堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下（『太平天国』3、71頁）。
- 24) 曾天養は広西桂平県人で、年は50歳余り、『天兄聖旨』で天兄キリストから400人を上帝会に参加させたことを賞賛された（巻1、庚戌年正月十六日）。彼は「剽悍異常、賊中号为能者」と言われ、11月に秋官又正丞相となったが、1854年8月に湖南岳州の城陵磯で湖南提督塔齊布に敗れ戦死した（張徳堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、60頁）。
- 25) 林啓容（即ち林啓榮）は広西へ移住した湖南人といい、楊秀清配下の「健児」で、南京到達後に將軍となり、6月に指揮に昇進して南昌攻撃軍を率いた。失敗後は石祥貞に従って九江一帯で活動し、1854年に殿右十二検点となって九江の守備を任されたが、1858年5月に湘軍の攻撃によって死亡した。張徳堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下によると「啓容残忍異常、每詐殺人以警衆、故羣下多憚之」という（『太平天国』3、65頁）。
- 26) 白暉懷は広西人で、南京到達後に指揮となった。南昌攻撃に参加し、失敗後は南京へ戻されたが、12月に再び功績をあげて検点となった。1854年の岳州城陵磯の戦いで敗退すると、天京の東牢につながれた（張徳堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、『太平天国』3、65頁）。後に甘王に封じられ、太平天国の滅亡時は江蘇高淳県一帯を転戦していたという。
- 27) 菊池秀明「太平天国の北伐前期をめぐる諸問題——南京から懷慶まで」国際基督教大学社会科学研究所編『社会科学ジャーナル』53号、2005年。
- 28) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』『太平天国』4、664頁。
- 29) 張徳堅『賊情彙纂』巻10、賊糧、口糧（『太平天国』3、277頁）。
- 30) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』『太平天国』4、656頁。
- 31) 謝介鶴『金陵癸甲紀事略』『太平天国』4、665頁。
- 32) 同治『新建県志』巻65、兵氛。
- 33) 向荣奏、咸豊三年五月初四日『鎮庄』7、26頁。
- 34) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、61頁。
- 35) 張亮基奏、咸豊三年七月初九日『鎮庄』8、423頁。
- 36) 張徳堅『賊情彙纂』巻10、賊糧、船運および倉庫（『太平天国』3、275、278頁）。
- 37) 向荣奏、咸豊三年五月十六日『鎮庄』7、179頁。
- 38) 向荣奏、咸豊三年五月二十二日『鎮庄』7、293頁。
- 39) 葉名琛奏、咸豊三年二月二十四日『鎮庄』5、339頁。
- 40) 葉名琛奏、咸豊三年二月二十四日『鎮庄』7、339頁。
- 41) 軍機大臣、咸豊三年五月二十八日『鎮庄』7、379頁。
- 42) 向荣奏、咸豊三年六月初八日『鎮庄』7、547頁。
- 43) 向荣奏、咸豊四年正月初六日『鎮庄』12、189頁。
- 44) 佚名『粵逆紀略』『太平天国史料叢編簡輯』2、39頁。
- 45) Ch. B. Maybon, *Historie de La concession Française de Changai* (范希衡訳『上海租界当局与太平天国運動』附録、第一輯、南京大学歴史系太平天国史研究室編『江浙豫皖太平天国史料匯編』江蘇人民出版社、1983年、471頁)。

- 46) 張芾奏、咸豐三年五月初七日『鎮庄』7、62頁。
- 47) 張芾奏、咸豐三年五月十四日『鎮庄』7、147頁。
- 48) 陳孚恩奏、咸豐二年八月十九日『宮中檔咸豐朝奏摺』5、544頁。陸元煥奏、咸豐二年八月十九日、同書545、547頁。陳孚恩奏、咸豐二年八月十九日、軍機處檔086115号、共に国立故宫博物院蔵。なお陳孚恩は団練結成や城壁修築のために銀13,400両を寄付したという（陳孚恩奏、咸豐三年五月十六日『鎮庄』7、194頁）。
- 49) 孫福謙稟江西軍情、咸豐三年五月、F.O.931 1518、英国 National Archives 蔵。
- 50) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、391頁。
- 51) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、61頁。張芾奏、咸豐三年五月二十一日は「省城聞警以來、居民紛紛遷徙、皆由官紳先期遠遁、以致人心渙散、輿堪痛恨」と述べたうえで、南安府同知楊正祥ら8名を革職するように求めた。また城内に残った紳士は徐思莊（已革山東按察使）、陳景謨（戸部候補郎中）、汪茹鑑（候補主事）であった（『鎮庄』7、278頁）。
- 52) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、391頁。
- 53) 江忠源奏、咸豐三年五月十八日『鎮庄』7、233頁。
- 54) 林福祥『守南昌広饒記』『太平軍在江西史料』521頁。
- 55) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、391頁。
- 56) 民国『南昌県志』巻54、兵革。
- 57) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、391頁。
- 58) 張芾奏、咸豐三年五月二十一日『鎮庄』7、276頁。なおこの戦いについて林福祥『守南昌広饒記』は「二十日、江廉訪派楚勇由空心砲台出隊、予與府勇從之、與賊匪鏖戰三時、斬獲約二百、賊退據芝麻園之土阜。予登砲台、放連環火箭、並点銅砲擊之、中賊隊、賊披靡、兵勇復殺賊甚衆」と述べている（『太平軍在江西史料』521頁）。
- 59) 彭旭『江西守城日記』は「是役也、楚勇以数百敵賊数千、雖失一驍將、妖鋒稍稍挫矣」と僅かな兵で勝利した功績を称えたが、一方で李光寛が「素勇輕敵、陷陣遇害、遽撤隊、賊伏起、紛紛尾躡」とあるように軽率な攻撃で失敗したと認めている（『太平天国史料叢編簡輯』2、391頁）。また張芾は「江忠源忠勤懇勉、籌畫周詳、營員兵丁無不悅服、実屬禦侮之才」と称え、戦死した李光寛と負傷した林福祥に篤い褒美を与えるように求めた（同奏、咸豐三年五月二十一日『鎮庄』7、276頁）。
- 60) 杜文瀾『平定粵匪紀略』巻3、咸豐三年癸丑および「江忠烈公行状」『江忠烈公遺集』附録。
- 61) 張芾奏、咸豐三年五月二十一日『鎮庄』7、276頁。
- 62) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、61頁。
- 63) 張芾奏、咸豐三年五月二十九日『鎮庄』7、407頁。民国『南昌県志』巻54、兵革。
- 64) 張芾奏、咸豐三年六月初四日『鎮庄』7、463頁。
- 65) 同治『南昌府志』巻18、武備、兵事。同治『新建県志』巻65、兵氣。ただし檔案史料および彭旭『江西守城日記』、民国『南昌県志』はこの日の地雷攻撃について言及していない。南昌到達後5日間で長い坑道を完成することは難しいと思われるが、長沙でも蕭朝貴らの先鋒隊は1週間ほどで城門の下に短いトンネルを掘り、地雷攻撃を行った（菊池秀明「太平天国の長沙攻撃をめぐる考察」『金田から南京へ——太平天国初期史研究』汲古書院、2013年、303頁）。
- 66) 張芾奏、咸豐三年六月初四日『鎮庄』7、463頁。また彭旭『江西守城日記』は「廿七、八兩日、縋勇往燒文孝廟、堅固未能入、且多傷者」と述べている（『太平天国史料叢編簡輯』2、391頁）。
- 67) 江忠源奏、咸豐三年五月十八日『鎮庄』7、233頁。



- 68) 軍機大臣、咸豊三年六月初六日『鎮庄』7、506頁。
- 69) 崇綸奏、咸豊三年六月初一日『鎮庄』7、428頁。
- 70) 張亮基奏、咸豊三年六月初二日『鎮庄』7、443頁。
- 71) 駱秉章奏、咸豊三年六月十二日『鎮庄』7、594頁。ただしこの兵は集合が遅れ、江南大營へ向かっていた辰州兵200名が南昌に到達したため、後述の官兵600名が出発すると派遣は中止になった(同奏、咸豊三年六月二十一日『鎮庄』8、166頁)。
- 72) 駱秉章奏、咸豊三年六月二十一日・七月十八日『鎮庄』8、125, 555頁。
- 73) 張芾奏、咸豊三年六月初四日『鎮庄』7、463頁。また彭旭『江西守城日記』によると、この時章武軍(後の江西巡撫耆齡の率いる練勇)は初陣で、火弾を投げたところ誤って味方を殺傷した。また徐思莊の保信軍は38名の死者を出して敗走し、抬槍などを太平軍に奪われた(『太平天国史料叢編簡輯』2、393頁)。なお林福祥『守南昌広饒記』は「保信軍以違節制、失道敗績」とあるように、徐思莊練勇の敗因は江忠源の指揮に従わなかったためと述べている(『太平軍在江西史料』522頁)。
- 74) 張芾奏、咸豊三年六月初四日・六月初六日『鎮庄』7、465, 520頁。
- 75) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、61頁。
- 76) 杜文瀾『平定粵匪紀略』附記、逆踪記、『太平天国資料匯編』1、325頁。ただし頼漢英の無能ぶりを強調する議論は、後に洪仁達、洪仁発兄弟や洪仁玕の無能を告発した李秀成らの議論と一脈通じるところがある。あるいは楊秀清が権力を掌握する過程で、近親である頼漢英を批判することで洪秀全の権威を損なおうとした、政治的意図の込められた言説かも知れない。
- 77) 林福祥『守南昌広饒記』『太平軍在江西史料』522頁。
- 78) 同治『南康府志』卷10、武事。また張芾によると、太平軍が南康に迫ると、「郡城勢甚洶洶、又有賊匪流言傳播、声称居民若餽礼物交出官長、定不殺害民人、否則盡行屠殺」とあるように、贈り物をして地方官を差し出さないと殺戮に遭うとの恐怖感が住民の間に広がった。胡愷儀は「不安本分」で、吳景惺(武生)、黃幅僧らと「創議餽賊、並先將官長圍住、免致與賊打仗、賊匪遷怒地方、傷害百姓」とあるように、率先して降伏して住民を保護しようと考えた。そこで彼らは100余人で同善局へ押しかけ、城の防衛を協議していた知府恭安、知県羅雲錦、都司胡瑤林を囲んだ。この時太平軍が上陸を始め、清軍守備隊が敗北すると、胡愷儀らは城外へ出て太平軍に「情願餽礼」と叫んだ。すると太平軍の頭目が地方官の所在を訊ねたため、彼らは居場所を教えて1,000名余りの太平軍を先導した。一行が同善堂に到着すると、太平軍は恭安らの身柄と準備された贈り物を船内に運ばせ、衙門や廟を焼いて監獄を破った。また太平軍は胡愷儀らに乗船を命じたが、彼らは隙を見て逃走した(黃幅僧らは逃げられなかった)。太平軍は翌日南昌へ向かった。後に取り調べに対して胡愷儀は「実困惑於賊匪流言、恐被殺戮、一時起意圍官、以備賊匪查問、並非自行縋送、亦未開放監犯」と供述した。胡愷儀らは叛逆の罪でさらし首となり、逃走した都司胡瑤林も処刑された(張芾奏、咸豊四年正月二十二日『鎮庄』12、329頁)。
- 79) 沈兆霖奏、咸豊三年七月十二日『鎮庄』8、471頁。また夏燮『粵氛紀事』卷6、西江反噬によると、吳城鎮でも同じ動きが見られたが、地方官たちはいち早く逃亡したという(羅爾綱、王慶成主編、中国近代史資料叢刊続編『太平天国』4、広西師範大学出版社、2000年、163頁)。
- 80) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、59, 58頁。
- 81) 夏燮『粵氛紀事』卷6、西江反噬、続編『太平天国』4、163頁。
- 82) 鄒樹榮『藹青詩草』六月十八日江省被圍感賦七律三首(癸丑)(『太平軍在江西史料』472頁)。
- 83) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、58, 80, 60頁。なお鄒樹榮『藹青詩草』六月

- 十八日江省被圍感賦七律三首（癸丑）も「賊圍新城、澹台、章江三門、南新二邑以豕鷄鴨銀米進貢……、報以『太平詔書』『天条書』『幼学詩』『三字經』数卷」とあるように、進貢に来た人々に宗教的書籍を贈ったと述べている（『太平軍在江西史料』472頁）。
- 84) 鄒樹榮『藹青詩草』六月十八日江省被圍感賦七律三首（癸丑）（『太平軍在江西史料』472頁）。毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、58頁。
- 85) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、82頁。
- 86) 孫福謙稟江西軍情、咸豐三年五月、F.O.931 1518。
- 87) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、79頁。
- 88) 同治『新建県志』卷65、兵氛。
- 89) 張芾奏、咸豐三年六月十二日『鎮庄』7、600頁。馬濟美奏、咸豐三年六月十二日、同書603頁。また彭旭『江西守城日記』によると、この他に參將文忠らの率いる饒州兵200名、都司善及らの率いる撫州兵200余名、把總吳必高らの率いる銅鼓營兵200余名、五品軍功程智泉らの率いる広東勇560名、徐徳度率いる景德窰勇500名などが南昌に到着した（『太平天国史料叢編簡輯』2、394頁）。
- 90) 張芾奏、咸豐三年六月十八日『鎮庄』8、80頁。
- 91) 張芾奏、咸豐三年六月二十五日『鎮庄』8、204頁。
- 92) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、395頁。
- 93) 張芾奏、咸豐三年六月二十六日『鎮庄』8、230頁。
- 94) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、396頁。
- 95) 李濱『中興別記』卷8（『太平天国資料匯編』第2冊上、127頁）。また毛隆保『見聞雜記』は「伝聞総戎（馬濟美）頗英武、累請戰、江臬司（忠源）忌功、中丞（張芾）持重不允。至十七、八日、天雨、江臬司檄総戎出戦、総戎不可。江臬司激之、総戎忿、率兵千余出戦、遇賊二千余、兵懼不前。総戎奮謂士卒曰：『吾已拼一死、爾等各保性命罷』。遂棄頂帽、匹馬向前殺賊、頗有殺傷、中数矛……、始落馬陣亡」とあるように、馬濟美の死は彼の功績を妬んだ江忠源らが追いつめた結果であると述べている（『太平天国史料叢編簡輯』2、63頁）。
- 96) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、396頁。
- 97) 李嘉端奏、咸豐三年六月十五日『鎮庄』8、26頁。
- 98) 張芾奏、咸豐三年六月二十五日『鎮庄』8、204頁。
- 99) 石祥貞は金田から南京までは軍事に参加しなかったが、「癸丑五月、頼漢英等率羣醜犯江西、為官兵所敗請援、楊賊始令祥貞與韋俊等往救、因陷九江湖口等処」とある。その後南京、安徽、湖南、湖北で活動したが、1854年に南京付近の七橋甕で敗北して戦死した（張徳堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、『太平天国』3、55頁）。
- 100) 韋志俊は南京到達後に国宗となり、「五月楊賊令与石祥貞率羣醜援頼漢英等、因擾九江一帶」（張徳堅『賊情彙纂』卷2、劇賊姓名下、『太平天国』3、55頁）とある。彼は1854年に提督軍務銜を与えられ、1856年の武昌攻防戦で羅沢南を戦死させた。天京事変後は江西、安徽を転戦し、1858年には右軍主將に封じられたが、翌年10月に湘軍に降伏した。
- 101) 張亮基奏、咸豐三年七月初九日『鎮庄』8、423頁。また夏燮『粵氛紀事』卷6、西江反噬にも「突於十五日（7月20日）接據安徽探報稱：自初十日（7月15日）至十四日（7月19日）、有賊艘千余、連檣而過、經魯港三山板子磯等処。援賊復至、省中之守益形竭蹶矣」（続編『太平天国』4、163頁）とある。ここで援軍について船1,000隻説が生まれた背景には、長江沿岸各地の稟報を受けた李嘉端が「初十日（7月15日）有賊船千余艘、自金陵開出三山磯……、十八日

- (7月23日)全過懷寧(咸豐三年七月初五日『鎮庄』8、370頁)と報じた事実があったと見られる。ただし李嘉端はこの太平軍部隊の行き先について言及しておらず、多くは安慶一帯に留まったと推測される。
- 102) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、396頁。杜德風「一八五三年太平軍進攻南昌之役」。朱哲芳『太平天国西征史』289頁。
- 103) 張芾奏、咸豐三年七月初四日『鎮庄』8、357頁。
- 104) 張芾奏、咸豐三年七月初四日『鎮庄』8、354頁。
- 105) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、396頁。なお張芾は7月31日の上奏で「臣察看賊勢、較上次打仗人数加增三倍之多、即連日統到賊船約有数百号、賊衆已逾二万、我軍雖屢次獲勝、究覺兵力單薄、不敷調遣、未能四面攻剿」と述べたが、馬濟美の死後さらなる援軍派遣を望んだ張芾の作文と考えられる(咸豐三年六月二十六日『鎮庄』8、230頁)。
- 106) 向榮奏、咸豐三年七月十九日『鎮庄』8、569頁。
- 107) 李濱『中興別記』卷9(『太平天国資料匯編』第2冊上、144頁)。李嘉端奏、咸豐三年八月二十七日『鎮庄』9、459頁。
- 108) 菊池秀明「太平天国の北伐前期をめぐる諸問題——南京から懷慶まで」。
- 109) 張芾奏、咸豐三年七月初四日『鎮庄』8、354頁。彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、396頁。
- 110) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、397頁。
- 111) 張芾奏、咸豐三年七月十五日『鎮庄』8、511頁。
- 112) 張芾奏、咸豐三年八月初一日『鎮庄』9、81頁。
- 113) 彭旭『江西守城日記』『太平天国史料叢編簡輯』2、398頁。またこの日の敗因について、『平定粵匪紀略』卷2は「(湘勇)因進兵太銳、先勝後挫」と述べている(『太平天国資料匯編』第1冊、24頁)。
- 114) 張芾奏、咸豐三年八月初一日『鎮庄』9、81頁。ここで羅信東、羅鎮南は羅沢南の同族に見えるが、『羅氏族譜』(咸豐年間修、手抄本)によると羅沢南一族の字輩は「日一拱一嘉一沢一兆」と続いており、少なくとも近い親族ではなさそうである。なお同族譜および『羅氏四修族譜』首卷5、允吉公伝・曾夫人墓誌銘によれば、羅沢南の四男兆作は胡林翼の「季妹」を、五男兆升は曾國藩の娘(曾紀琛)を妻に娶っている。これらの族譜は河野吉成氏(東京大学大学院)の好意によって閲覧できた。記して感謝したい。
- 115) 致駱籲門、咸豐三年十一月(中国社会科学院近代史研究所編『曾國藩未刊往來函稿』岳麓書社、1986年、32頁)。
- 116) 王闓運『湘軍志』曾軍篇第二、岳麓書社、1983年、21頁。
- 117) 『羅忠勇公年譜』。なお『羅氏四修族譜』首卷5、忠節公事略には「(咸豐)二年、粵逆洪秀全等犯長沙、令属公練丁設防、号湘勇。明年侍郎曾公國藩奉命督治团防。適江西上游土匪竄桂東、檄公進剿、行次衡山、忽草市寇起、衆千余。公擒首逆劉積厚等二十余人、進擊桂東、賊走之」とある。
- 118) 毛隆保『見聞雜記』七月見聞記に「十五日(8月19日)湖南夏觀察督帶楚勇過県、亦繞道由三江口進省。至三江口、郷勇与兵口角、遽用刀鬪殺、各有殺傷、遂各聚衆、即於墟場排列鎗炮、將大相關殺。夏觀察始命人勸不止、繼遣碑礮頂者二人、持黄旗一揮、始各住手、蓋幾幾成大變云」(『太平天国史料叢編簡輯』2、66頁)とある。
- 119) 王定安『湘軍記』卷2、湖南防禦篇、岳麓書社、1983年、13頁。なおその日付については、曾

国藩が六月十二日の上奏で清徳を「臣到省半年、每逢三、八之期、督率弁兵、齊集校場操閱、該將並未到過一次、実出情理之外」と弾劾しており、7月以前のことで考えられる（『鎮圧』7、598頁）。

- 120) 王闓運『湘軍志』曾軍篇第二、岳麓書社版21頁。
- 121) 張芾奏、咸豊三年七月十五日『鎮圧』8、511頁。
- 122) 王闓運『湘軍志』湖南防守篇第一、岳麓書社版6頁。張芾奏、咸豊三年八月初一日『鎮圧』9、78頁。なお江忠源が湘勇を泰和県反乱軍の弾圧に振り向けた理由について、簡又文氏も「自是之後、忠源以新兵不可用、卒移沢南軍剿土匪於南路」とあるように、新兵である湘勇の戦闘力に見切りをつけたためと述べている（『太平天国通史』中、975頁）。ただし彭旭『江西守城日記』によると、湘勇は8月31日の戦闘でも「[羅]沢南、[朱]孫詒等督勇逼賊為營、賊鋒至、屢卻屢進、湘勇躡擊至賊營」（『太平天国史料叢編簡輯』2、399頁）と活躍していた。こうして見ると江忠源が湘勇を泰和県反乱軍の弾圧に向かわせたのは、直接には後述の如く吉安府城が危機に瀕していたためであったが、その実戦闘力の高い湘勇が楚勇の功績を奪うことに脅威を感じたためかも知れない。
- 123) 致駱籲門、咸豊三年九月『曾國藩未刊往來函稿』6頁。
- 124) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、74、75頁。
- 125) 張芾奏、咸豊三年七月十五日『鎮圧』8、511頁。
- 126) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、75頁。
- 127) 張芾奏、咸豊三年八月初一日『鎮圧』9、79頁。
- 128) 張芾奏、咸豊三年八月初一日『鎮圧』9、80頁。
- 129) 張芾奏、咸豊三年八月十八日『鎮圧』9、332頁。同治『饒州府志』卷8、武備志、武事。また同治『樂平県志』卷5、武備、武事は「七月二十三日、賊乘大漲、千艘來擾、顧不甚肆虐以餌愚民、殆其故智。二十八日退去」とあり、その略奪行為は抑制されていたと述べる。
- 130) 夏燮『粵氛紀事』卷6、西江反噬、統編『太平天国』4、166頁。
- 131) 夏燮『粵氛紀事』卷6、西江反噬、統編『太平天国』4、164頁。また饒州では「漕倉待運之米、除拔付九江外、仍存万余石、又倉穀数千石、賊虜居民舂播、以給軍糈」とあるように、倉庫の漕米や備蓄米を精米させて軍用に供した（同書165頁）。なお張芾も豊城県で「劫搶倉庫」、瑞州でも「掠取倉庫」とあるように食糧を獲得したと報じている（張芾奏、咸豊三年七月十五日『鎮圧』8、511頁、同年八月初一日『鎮圧』9、79頁）。
- 132) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、64、65頁。
- 133) 張德堅『賊情彙纂』卷10、賊糧、船運および倉庫（『太平天国』3、275、278頁）。
- 134) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、66頁。
- 135) 夏燮『粵氛紀事』卷6、西江反噬、統編『太平天国』4、165-6頁。また浮梁県では「莠民」の石芒沅らが「緝官搜印、送往賊營、得受銀兩」とあるように太平軍に協力して褒美を与えられた。（張芾奏、咸豊三年十二月二十九日『鎮圧』12、121頁）。
- 136) 張芾奏、咸豊三年八月初一日『鎮圧』9、84頁。
- 137) 毛隆保『見聞雜記』『太平天国史料叢編簡輯』2、66、64頁。
- 138) 夏燮『粵氛紀事』卷6、西江反噬、統編『太平天国』4、166頁。ここで都昌とは南康府都昌県を指すと思われる。
- 139) 同治『波陽県志』卷21、武事考、附、沈衍慶答夏燮甫書。
- 140) 張芾奏、咸豊三年四月十九日『宮中檔咸豊朝奏摺』8、210頁。

- 141) 張芾奏、咸豐三年九月初八日『宮中檔咸豐朝奏摺』10、432頁。
- 142) 光緒『泰和県志』卷9、政典、兵寇。光緒『吉安府志』卷20、軍政志、武事。同治『安福県志』武事。張芾奏、咸豐三年七月初四日・八月初一日・八月十八日・八月二十四日『鎮圧』9、84、78、326、340、431頁。同奏、咸豐三年九月初八日『鎮圧』10、9頁。
- 143) 同治『龍泉県志』卷18、雜類。また鄒恩隆が用いた「符術」について、毛隆保『見聞雜記』は「持一白紙扇、念咒書符、臨陣可扇鎗子、炮子即不能」と述べている（『太平天国史料叢編編輯』2、67頁）。また太平天国期の江西の宗教結社については野口鉄郎「齋匪と會匪」『明代白蓮教史の研究』雄山閣出版、1986年、455頁。
- 144) 張芾奏、咸豐三年八月初一日『鎮圧』9、76頁。また同奏、咸豐三年八月十八日、同書326頁は「該匪徒等連日在〔吉安〕城外焚搶、並將古東山安福県囤儲漕米、廟宇一併焚燬」とあるように、貯蔵された漕米を焼き払ったと述べている。
- 145) 張芾奏、咸豐二年十二月初一日『宮中檔咸豐朝奏摺』6、476頁。
- 146) 『江忠烈公遺集』附録、江忠烈公行状によると、江忠源が吉安救援に湘勇、楚勇3,000名を派遣しようとする、張芾らは城内の兵力が不足するとの理由で反対した。この時江忠源はいま泰和県の反乱軍鎮圧は容易だが、もし彼らが勢いを増して太平軍と連合すれば、南昌上下の連絡が絶たれる危険があると主張したという。
- 147) 張芾奏、咸豐二年十一月初八日『宮中檔咸豐朝奏摺』6、216頁。
- 148) 王植等奏、咸豐元年七月初十日『宮中檔咸豐朝奏摺』2、447頁。同奏、咸豐元年閏八月初十日・閏八月二十五日・九月初五日『宮中檔咸豐朝奏摺』3、60、174、216頁。柏葰等奏、咸豐元年十月十三日、同書491頁。
- 149) 張芾奏、咸豐二年四月十六日『宮中檔咸豐朝奏摺』4、731頁。
- 150) 雷維翰奏、咸豐三年九月初一日『鎮圧』9、516頁。
- 151) 同治『都昌県志』卷8、兵事。光緒『安徽通志』卷102、武備志、兵事。
- 152) 張芾奏、咸豐三年八月二十四日『鎮圧』9、429頁。江忠源奏、咸豐三年八月二十四日、同書428頁。
- 153) 江忠源奏、咸豐三年七月二十九日『鎮圧』9、59頁。この時に江忠源が推薦したのが夏廷樾、四川嘉定府知府俞文詔、右江道張敬修および林福祥であった（同奏、咸豐三年七月二十九日、同書60頁）。
- 154) 軍機大臣、咸豐三年八月十二日『鎮圧』9、208、209頁。

